

あの日あの時

(一) 私の出生とザキの界限

私は、明治二十九年（西暦1896年）、四月四日、午後四時頃、横浜市伊勢佐木町二丁目二十四番地、寄席新富亭経営者、父竹内竹次郎、母ミツヨの二男として誕生。

母方の祖父の話によれば、生れたばかりの私は、掌に軽々と乗る、極めてひ弱な赤児だったという。でも、その後、母がある坊さんに、私の運勢を占ってもらったら、かなりの長命だろうと言われたそうです。

これは私が小学校に通うようになってから聞いた話です。

明治二十九年といえば、伊藤博文内閣の時代、日清戦争終結直後、通商条約の調印と共に、一応、平和が回復した年であった。後年、健康診断で幾度もご厄介になったレントゲンが初めて輸入された年でもある。

この年、横浜にペストが発生したのは、恐らく、棉花の輸入税廃止により、その輸入が増加したためではなかっただろうか。

日中、よく、関内方面に、火事のように濛々たる黒煙が立ち昇っていたのは、ペスト患者の出た家を焼いていたのでした。

この年は、また、凶年で、死者の数も少なくなかった。樋口一葉が二十五歳の若さで亡くなっている。

兄は、私より二つ年上で、正雄といい、私は秀雄と命名された。物心がついてから、自分の記憶にまざ／＼と残っているのは、明治三十二年（1899年）八月、関外の大火で、叔母の背に負われて、わが家が猛火に包まれるのを、振り返りながら、亀楽煎餅の横から鶴の橋を渡り、寿町の叔父の家に避難した時の恐ろしさである。

私達は、翌年、新富亭が新築されるまで、叔父の家に厄介になった。それで、兄は寿小学校に入学して、卒業するまで、伊勢佐木町から通学した。

明治三十四年（1901年）、大岡川に通じるチャンネル（水路）に沿った万代町ばんだい

の幼稚園に通っていた頃、女の子達と、お手々つないで遊戯をしたことを覚えている。兄が学校からの帰途、これを見かけて、家に帰ると、「お前、いいなあ」とよく冷かされた。

この年の暮、十二月十一日から、向こう五日間、新富亭で大演芸会が催されました。この時のビラを、偶然、坪内博士記念早大演劇博物館で発見した経緯については、昭和五十四年五月号のタウン誌「浜っ子」に、「新富亭のビラ」と題して詳報しました。

また、この年、教育界の先覚者、慶応の福沢諭吉先生が六十八歳でお亡くなりになり、また、後の早大教授、学生野球の父と仰がれた安部磯雄先生達が社会民主党を結成した。

明治三十五年（1902年）、私は、吉田尋常高等小学校に入学した。この年、日英同盟が締結され、イギリスでは、六十年の長きにわたったヴィクトリア女王の時代が終り、エドワード七世の御代となった。わが国では、自由の精神と学問の独立を叫ぶ大隈伯の早稲田大学が創立された。また、この年、明治詩壇の革新運動に、

その生命を燃焼し尽したあの正岡子規が三十六歳で逝去している。惜しむべきこの天才は、今日隆盛を極めているベースボールの開拓者でもあった。

さて、吉田小学校は、当時、本校と分校とから成り、本校は、土蔵造りの本建築でしたが、分校は、木造平屋建で、窓には紙張りの障子が入っていた。

この分教室は、後には、本願寺の境内になった。

この分校時代の友達の話は、ほとんど記憶にないが、ただ一人、真金町まがねの貸座敷Fの娘さんで、お千代さんという子の印象だけが明瞭に残っている。色白で、聡明な眼差し、微笑が何ともいえず魅力的で、ことに、冬、雪の朝など、例の窓から差し込む光線で、彼女の顔が一段と輝いて見えた。そんな時、私には彼女の視線が、とてもまぶしくて、声をかけるだけの勇氣もなかった。これは初恋なのだろうか。

明治三十六年（1903年）、小学校の国定教科書制が公布され、鼠色のパットしない教科書が使用されるようになった。この年、歌舞伎の名優、九代目市川團十郎が六十七歳で歿し、「金色夜叉」の尾崎紅葉が三十七歳の若さで亡くなっている。

「熱海の海岸散歩する、貫一お宮の二人づれ」などが盛んに歌われるようになって

たのは一体、いつ頃からだったのであろう？

明治三十七年（1904年）、日本とロシアの国交が断絶、遂に、宣戦が布告され、その交戦状況を、国民は皆、首を長くして待っていた。その頃、新富亭の隣に、新堀の正ちゃんという私より年下の友達の家で、博集堂という書店があった。この店先に、交戦の模様を伝える絵双紙が掲げられるのを、私どもは見に行ったものである。絵空事でもあれ、とにかく、国民は、それを見て随喜の涙を流したのである。

この年、小泉八雲（ラファディオ・ハーン）が亡くなっている。

明治三十八年（1905年）、日本海の日海戦で、連合艦隊司令長官東郷提督によるZ信号「皇国の興廃、この一戦にあり……」は、あまりにも有名である。この決戦こそ、正に、シーザーの「ルビコン河を渡る」(Cross the Rubicon)のような乗るか、そるかの大冒険であったが、幸運にも、ロシアのバルチック艦隊を撃滅することが出来た。これは、イギリスのエリザベス一世の御代に、西班牙のアルマダ艦隊を、イギリス海峡に迎え、これを撃退したあのドレイク提督の快挙に比較されるものであった。

日露戦争は、アメリカの斡旋により、ポーツマスで講和条約が調印された。

この時の日本全権大使は小村寿太郎外相であったが、この条約を不服とする国民が激昂したために、小村さんは、横浜に着くや、隠れるようにして東京に戻られた。この時の不穏な空気は、小学生の私達にも察知された。

また、この年の夏から、夏目漱石の「吾輩は猫である」が雑誌ホトトギスに連載された。

ラフカディオ・ハーンが東大講師を辞任した後、漱石は同大学英文科の学生に、十八世紀のイギリス文学を講じたが、二ケ年間のイギリス留学による蘊蓄を傾けた名講義であった。

明治三十九年（1906年）三月、尋常四年の課程を修了して、高一に進む。学校は真金町の遊廓裏に新築された第二高等小学校だった。この学校は男子ばかりで、隣に、女子だけの第三高等小学校があった。例のお千代さんの顔は、もう見られなくなった。

ここで再び自分の生家と、ザキの界限の思い出を語ろう。

伊勢佐木町通は、今日では、一丁目から七丁目までであるが、明治、大正時代には、伊勢佐木町は二丁目までで、今日の三丁目は松ヶ枝町、四丁目から五丁目が賑町、六、七丁目が長島町だった。

私の生家、新富亭は、木戸口が伊勢佐木町二丁目二十四番地。これが私の本籍であるが、木戸口の左手にあった三軒の店は松ヶ枝町三十二番地で、新富亭出演中の芸人宛の郵便物は、松ヶ枝町三十二番地になっていた。このことは、故六代目三遊亭円生師著「寄席切り絵図」にもそう出ている。

新富亭は、当時としては珍しい木造三階建て、野毛山や、中村町の丘から遠望すると、まるで大きなお寺のように見えた。また、南太田方面から眺めると、屋号の竹がはつきりと見えた。

二階は、木戸口の大階段を上ると、約百畳敷の客席で、その客席の右側には、中二階風の座席があり、その仕切りに、渡り廊下用の板が敷いてあった。また、三階の棧敷席を支える鉄の円柱が左右に三本ずつくらいあった。

その筋への届出では、定員六百八十名となっていたが、正月などの書き入れにな

ると、壹千名を越えることがしばしばあった。そうした大入りになると、常勤の若い衆の外に、関内から床屋の清吉さんが応援に来てくれた。彼は、関内の料亭の女将や芸者衆の顔や襟足を剃る床屋で、通称、床清とこせいと云い、商売の道具箱を片手に歩くその姿は、歌舞伎狂言「梅雨小袖昔八丈」の髪結新三のようないなせな男だった。

正面、高座の両脇には、「沢の鶴」から寄贈されたうるし塗りの縦長な額があった。また、正面の天井に近く、「鏡花水月」という額がかかっていた。誰の書かは覚えていない。高座の左側には楽屋があり、その二階には真打のための部屋があった。その反対側の二階は、父と私の居室になっていた。六畳くらいの狭い部屋で、その窓からは、遠く野毛山のお不動さんが見えた。部屋の正面に神棚、右側に仏壇、簞笥等があった。

この部屋の下は、お茶所。つまり、中入りにお客様に売るお茶やお菓子がおかれており、また、家族の炊事場になっていた。そして、この部屋の前には、木戸から上って来た人がちょっと一休みする三畳ばかりの溜たまりがあり、角火鉢かくが置いてあった。

顔馴染の記者や木戸御免の連中が一服するところだった。

父竹次郎の人柄については、故人となった桂文楽師匠の自叙伝ともいうべき「あばらかべっそん」（青蛙房刊）や、故六代目三遊亭円生師の前記「寄席切り絵図」に詳述されていますが、市内磯子の住人だった元落語家、古今亭志ん馬師こと、金川利三郎氏が、昭和三十二年十一月十五日、毎日新聞横浜支局から発刊された「横浜今昔」の中で、「ハマ一番の寄席新富亭」と題して、同氏が出演した当時の思い出話を語っていますが、親父のプロフィルが実によく描かれている。この「横浜今昔」は各界の名士による古き横浜の思い出話を編集した貴重な体験談であるが、近年神奈川県新聞が編集した「横浜経済物語」は、ハマの財界並びに政界に貢献した諸名士を偲ぶ好個の資料として、これまた横浜市民にとって、一読に値するものとして推奨したい。

さて、ザキの商店は、今日では全く変わってしまったが、昔から残っている店といえば、一丁目の津田さんの武蔵屋とか、いせ一、みのや、二丁目の安川商店、勉強堂、亀楽煎餅、花見煎餅、若林食器店、松ヶ枝町（現三丁目）では中山判子屋（元

袋物店）、満利屋洋品店、白牡丹、加藤回陽堂、弘集堂などである。

明治時代には、今の不二屋菓子店の前に、越前屋という呉服店があり、店の畳敷のところに、番頭や丁稚が控えている。番頭が、お客様からうけたまわった注文の品を告げると、丁稚が大きな声で、「ハイ、ハイ」と応答しながら奥の方へ走って行く風情は、あの歌舞伎の名狂言、「弁天小僧」の浜松屋の店先そっくりであった。

この越前屋の前に、「あらゐ」という料亭があった。その入口のところには、生け簀^すがあって、その中に、生きのよい魚がいつも泳いでいた。この「あらゐ」の隣に、「荒井屋」というすき焼専門の料理屋があった。

「あらゐ」の向隣は「四ツ目屋」という化粧品店で、その直ぐ裏が有名な「吉の谷^{たに}」という汁粉屋だった。前述した越前屋の隣は「まからぬや」という雑貨店だった。因に、詩人島崎藤村が、若い頃、この店に奉公したことがあったそうだ。これと同名の雑貨店が、松ヶ枝町の「加藤回陽堂」という薬屋の並びにあった。この回陽堂の前あたりに、岡部屋という呉服店や、左右田銀行の支店があった。回陽堂と

同じ並びの弘集堂書店の御主人は天野さんと云い、その息子さんは、確か、横浜一
中の出身で、私の後輩であると同時に、私が横浜高工教授時代の教え子の一人だっ
た。この天野君の店の隣に、これまた有名な三河屋という羊かん屋ようかんがあった。そし
て、この店の前が例の田中茶店でした。この田中の横を入ると、明治時代には相生
座という芝居小屋があり、新派の柴田善太郎などが出演していた。

大正時代になると、そこに横浜相撲常設館が出来た。館主は神奈川の加藤弥惣次
氏で、大相撲の地方興行の時以外は、普段、映画館になっていた。

映画といえ、田中茶店の前に、横浜電気館という小さい映画館があった。

この松ヶ枝町の隣が今日の伊勢佐木町四丁目で、当時は賑町一丁目だった。この
賑町と松ヶ枝町との間に、長者町通が南北に、一丁目から九丁目まで続き、家具と
か、菓子の間屋が沢山あった。

賑町一丁目の角、大正時代には、日本最初の洋画の封切り館、オデヨン座のそこ
ろに、以前、三茂さんもという料理屋があり、また、その隣に錦輝館という、二階に畳の
客席のある小さい映画館があった。

この錦輝館の筋向いに、ハマでは有名な芝居小屋、「喜楽座」があった。その隣には、牛ぎゅうどんの店とか、豆屋などがあり、長者町の角は確か、呉服屋だった。

喜楽座の筋向いに、賑座、後の旭座があった。喜楽座と同じ並びに、「寿亭」という浪花節の定席があった。また、賑町二丁目の角には⑩系の寄席、「富松亭」があった。これは、養子政吉の経営で、義太夫とか源氏節を興行していた。

長島町になると、自分の記憶もちょっと怪しくなる。今の阪東橋辺に、水天宮様のあったことと、小さい芝居小屋があつて、小学生の頃、確か福富町辺の子供達と一緒に、夏の夜、そこで相撲をとったことがあつた。当時、夏になると、子供相撲が流行して、町内の大人がよく懸賞などを出して、子供達に相撲をとらせて喜んだものである。

長島町から今の阪東橋辺を過ぎ、日本橋を渡ると、あれから先は、お三の宮へかけて、田圃道があり、私ども子供達は、田圃で目高すくを掬すくって喜んだものである。尤もこれは尋常三年までの話である。

尋常四年の頃から、野球が好きになった私は、高一になると、昼休みを利用して、

校庭でスポンジ・ボールで野球をやり、土、日には学校裏手の空き地で硬球で試合をしたりした。

この年（明治三十九年）、坪内逍遙が文芸協会を設立。日本社会党の結成。電車の焼き打ち事件等があった。島崎藤村の「破戒」の出版によって、自然主義文学の隆盛を物語る年でもあった。

明治四十年（1907年）、高二に進級。英語の勉強のため、横浜商業専修学校（夜間）に通った。面接試験の結果、私は丙組に編入された。教科書は岸本能武太先生編集のチョイス・リーダーズの巻二であった。そのテキストで、怠惰な一人の生徒が、他の生徒が教科書から眼を逸らしていたと教師に告げ口したところ、「お前こそ、よそ見をしていたんだ」と叱られ、「ま、ま、と捕まった」（He was fairly caught）という話が、いまだに忘れられない。

商業専修の夜学は、私にとっては珍しい経験で、新しい友達もできた。正金銀行（今日の東銀）の給仕、山屋琢君を知ったのも、この時であった。

冬の寒い夜。放課後、辻角で売っているホカホカした今川焼と一緒に食べた思い

出もなつかしい。

横浜の市電が初めて、神奈川と、元町の「西の橋」間に開通し、そのチン／＼電車の灯を、講談調で面白く語る修身の神尾先生の講話に聴き入りながら、講堂の窓から眺めた思い出が蘇って来る。これと関連して思い出すのは、横浜駅の前にある噴水の周囲を飛び廻っていた時、足が滑り、中に落ちて、着物をぐっしりと濡らしてしまい、帰宅して、母からひどく叱られたことである。

(二) 横浜駅（現桜木町）と港方面

小学生時代、新富横町の駄菓子屋へ日参して、一銭のミカン水や、五厘の駄菓子に舌鼓したつみを打っていた私達は、まだ瓦斯燈のめずらしかった伊勢佐木町通で、日露戦争直後、帽子を正しく被って戦艦、逆に被って水雷という、海戦ごっこ遊びをして走り廻っていたが、学年の進むにつれ、羽衣町の弁天様境内の空地で遊ぶようになり、更に横浜公園まで出かけ、桜並木の間に狭い空地を見つけて、野球をするようになった。

また、安政六年（一八五九年）、関門として架橋されましたが、明治二年に、わが国最初の鉄橋に改装された通称、鉄の橋を渡り、尾上町から大江橋、弁天橋の方面へ足を伸すようになった。

横浜駅（現桜木町駅）前の噴水のことや、また、高島町から横浜駅へかけて、いったちの生垣^{いけがき}があり、そしてその沿線には、横浜ドックがあつた。ドックと云えば、吉川英治氏の少年時代が偲ばれるのであるが、このドックで真黒になつて働く労働者、カンカン虫（船体の錆^{さび}を落すため、カン／＼と敲^{たた}いたからであらう）が、一日の労働を終つて、夕方伊勢佐木町通を帰つて来る光景を、新富の二階からよく見かけたものである。

また、駅に着いた汽車が新橋（現汐留貨物駅）に戻るか、もしくは、東海道を更に西へ下るために汽罐車の方向変換の操作をする回転台を柵^{のぞ}の下から覗いたことは、明治生れの浜っ子だったら、誰でも覚えていゝであらう。慶応義塾大学の学長だった小泉信三先生の如き謹厳な方も、「横浜今昔」の中で、その思い出を語っている。

近年わが俳壇の代表者だった大野林火氏は、神中（横浜一中）の後輩であるが、氏もこの回転台の思い出を語り、ターン・テーブルという如何にも浜っ子らしい英語で表現している。その林火先生が、昨年病氣加療中、薬石効なく永眠なさったとのこと、真に残念でした。

私は、近年、日曜日には、つとめて、教会に出席して自己反省の静かな時間を持つようにしております。この教会は、山下町の横浜海岸教会というわが国最古のプロテスタントの教会で、尾上町の指路教会と共に由緒があり、明治維新以来、幾多の試練に耐え、特に終戦直後の混乱期に、信仰の燈火を^{ともしび}たやさず、今日まで、どうやら、頑張り通したのは、教会員一同の結束によるものではありませんが、歴代の牧師に有能なる人材を得たことは、伝統あるこの教会に対して、上よりの豊かなお恵みのあったことと私共は確信しております。

少年の頃から、海外発展を夢見ておりました私は、この教会に近い大棧橋が大好きで、外国船の発着を見に行くことが、とても楽しみでした。当時、大棧橋の上には、まだ今日のような上屋^{うわや}がなく、簀^すの子を張った棧橋を歩くとき、その隙間から

海水の揺れ動くのが見えて怖かった。ことに、雨上がりに、足駄履きで歩くのほとても気味が悪かった。

棧橋の入口で、米人の新聞売りがアドヴァタイザーとか、エキザミナーという英字新聞を大靴かばんに入れて売っているのが珍らしかった。

海岸通りのウォーター・フラントには未だ山下公園はなく、子供達の遊べる程の広場はなかったので、防波堤の中央部から出入する汽船を、ただ、うっとり眺め、ときどき、けたたましい汽笛の響に驚く鷗の飛び散る彼方に視線を投げるのでした。イギリス人経営の通称、二十番というグランド・ホテルや、フランス人経営のオリエンタル・ホテルなどの建物には、当時の子供達は余り親しみが持てなかった。ただ、棧橋の入口に近く、今日のシルク・センターのところにあった英一番というイギリス系のジャーデン・マセソンの赤い表構おもてがまえが強く印象に残っている。また、棧橋入口付近に、人力車が屯たむろしていたことや、グランド・ホテルの裏の人力車の客待ち風景は、初めて来日した外国人の眼には随分珍らしく映ったようだ。

例の小泉八雲、ラフカディオ・ハーンが、当時、横浜で見聞したわが国の風物に

関する記事には、小品ながら興味深いものがある。

吉田勘兵衛氏によって埋立てられたデルタ地帯、吉田新田しんでんには、鎌倉街道なまがかりの七曲に源を発する大岡川がある。そして、直接、大江橋、弁天橋の下をくぐって港に入る水路と、お三の宮のところで右折して、堀割を通り、八幡橋やはたから根岸の海に入る水路、また、日本橋のところで左折し、蓬萊橋ほうらい下をくぐって、大江橋手前の柳橋から右折する水路と合流し、中村橋の手前から左折して、中村町と山下町の河岸を経て、港に入る水路とが、クリークのようになっている。しかし、最近、日本橋から蓬萊橋に至る川筋は埋立てられて、緑の大通り公園となった。今日、この間に架っていた橋の名などを記憶している人は尠すくなからう。有難いことに、地下鉄、伊勢佐木長者町駅の改札口を出ると、正面の壁に、その橋名が図示してある。御参考までに記すと、

日本橋、阪東橋、横浜橋、武蔵橋、長島橋、山吹橋、千秋橋、鶴の橋、榎三橋、蓬萊橋という十の橋である。

この鶴の橋と榎三橋との河岸は、私共子供達にとっては、格好な釣り場でした。

釣り場といえ、桜木町から弁天橋を渡って直ぐ左折すると、港の入口に燈台局があった。その手前の河岸は私共の穴場で、竿を下すと、たちまち沙魚はぎが面白いように釣れた。

この釣り場を右折すると、御用邸があり、明治天皇が根岸の競馬場へ行幸遊ばされるときには、いつも新橋から横浜まで、御召し列車でおいでになり、御用邸で少休止の後、馬車で地蔵坂から山元町を経て、競馬場へ赴おもむかれた。

この御用邸の前に横浜小学校と、本町小学校とがあった。Y校の名校長美沢進先生が兼任された横浜商業専修学校（夜間授業）も亦ここにあった。自分も、英語の勉強のため、一年ほど通ったことがある。市電が、神奈川と元町の西の橋間に初めて開通した頃であった。

市電の開通が私共の足を伸してくれたことは事実だが、少年の機動力には余り影響しなかった。神奈川まで出かける用事も余りなく、元町へ行くにしても、勿論テ、ク、シ、だった。盛夏に、海へ泳ぎに行く場合も、電車は利用しなかった。当時、山下の海水浴場といえ、今日の港の見える丘の真下にあった小屋掛けの海水浴場で、

その裏山の断崖の中腹から^{かけひ}、海水浴客のために、飲料用の清水をひいていた。未だ八幡橋行の電車がなかったから、根岸へ泳ぎに行くときは、伊勢佐木町から徒歩で往復しなければならなかった。

前記山下の海水浴場行の早船^{はやふね}というのが吉田橋の橋詰から出ていた。船で行く場合は、勿論、大人の散財で行ったのだが、途中、谷戸橋のところで検問があり、係りの警官が人員の点呼をしたものだ。

ハマ育ちの少年が、早くから海に親しんだことは当然であるが、自分が初めて海で泳いだのは、新富横町に野州屋という宿屋があつて、その息子に繁ちゃんというかなり年上の餓鬼大将がいた。その繁ちゃんが、私達を誘つて、例の燈台局の突堤のところまで舟を漕いで行き、岸に舟をもやつて、泳ぐのだった。自分は、そのときはまだ泳いだ経験がなく、泳ぎ方などは全然知らなかった。そんな自分が、ぼんやり立っていたら、繁ちゃんが背後から私を、突然、突き飛ばしたので、私はドブンと海中におっこちた。その時、自分はただ無我夢中で、手足をバタ／＼動かし、やっと岸に這上^{はい}った。相当水を飲んだ。繁ちゃんは、私の死物狂いの奮闘を見

て、「それでいいんだ。分かったか」と云わんばかりに笑っていた。これが私の水泳教室で習った最初のレッスンだった。

同窓のSという友人と八幡橋まで遠征して根岸の海に入ったのは、多少泳げるようになってからであった。

また、伊勢佐木町から元町を通って、外人墓地を右手に見ながら坂を登り、ゲーティ座の先から右折して、海岸に通ずる細道を下り、狭い砂浜に出て、その片隅に着物を脱ぎ、早速、海に飛び込んだ。犬かき泳法でボチャボチャやっていると、たま／＼沖を航行する外国航路の汽船が眼に入る。海水と一緒に。こうした瞬間、海外発展の夢が甦^{よみがえ}るのだった。

泳ぎ疲れて、帰る頃には、腹がへるので閉口した。八幡橋へ行った帰りには、空腹のあまり、途中で、Sの家に立ち寄り、彼と一緒に^{ひっ}お櫃^{ひつ}を空にしてしまったこともあった。

当時、山下へ行くときは、金二銭の小遣をもらったものだが、この二銭が焼芋八個に化けて、あっさり腹中に消え失せたのは、そうした腹ペコ^{ハッ}のときであった。

もり、かけ蕎麦が一錢五厘だった時代に、二錢の焼芋を一度に平らげるのはちょっと大変だった。もり、かけで思い出したが、新富亭の右隣、岡田商店（NHKのスポーツ・アナウンサーだった有名な岡田実君の実家）の隣に中村屋という蕎麦屋があったが、伊勢佐木町通では一丁目の東京庵と共に評判の店であった。ザキには日本蕎麦屋の外に、博雅という中華料理店が、大正、昭和にかけて、非常に繁昌していたが、最近、この店がその姿を消してしまったのは、とても淋しい。私共浜っ子にとっては残念至極だ。

名前は忘れたが、裏通で、福富町の角に、小さい中華飯店があったが、少年の頃、一箇一錢のシユウマイを五個とか、ちよつと目先を変えて、チャーシユウを五錢ぐらい買った覚えがある。

松ヶ枝町の日清楼は、震災前からあった店だが、オデヲン座で映画を観た帰りに、よく立寄ったものだ。

横浜はハイカラな所だが、不二屋や、森永の進出以前には、伊勢佐木町でも洋食屋は、その数が少なく、松ヶ枝町の村田という天ぷら屋（因に、関東大震災のとき、

伊勢佐木町界限では、この店が出火の火元だったと聞いているの直ぐ裏に、清喜亭という西洋料理屋があった。もっとも、料理と云っても、カツレツ、オムレツ、コロッケ、エビフライ、それに、ライスカレーといった程度で、ライスカレーは確か八錢だった。村田の天井の並の値段と同じだった。私は、よく、ばーやのお鯉さんに注文の電話をかけさせたものである。「みさご」という寿司屋へも、そうした電話をかけさせたが、この寿司屋は、この通りでは、にぎりの味がよく、新富の中入りにはこの店からの寿司（俗称弥助）がお客様の御注文でとりよせられた。自分の食道楽は、どうやら、こうした店屋物の影響らしい。

(三) 小、中学から大学へ

横浜は野球の発祥地というので、野球用具なども早くから使用され、それを売る店がボツボツ市内に現れたが、私の記憶では、伊勢佐木の裏通、福富町に横浜ベールスボール商会というのがあった。たしか、海産物問屋の隣だった。その店の息子、宇治君は僕と同窓で、しかも、僕と席をならべていた。

その当時、自分はクラスの野球部（四チームを有していた）で、第一軍の投手、しかも、主将だった。僕の女房役の捕手、榊原は蓬萊町の紺屋、なかとら中虎の伴だった。彼が良いミットが是非欲しいと、しきりにいうので、僕は親父にさんざせびつて、大枚金四円五十銭出してもらって、宇治君の店から捕手用のミットを買い、それを野球部に寄付し、榊原に使用させたところ、彼は、それからすっかり乗り気になって、われ／＼バッテリーの成績が頓とみに上った。野球の話は、野球漫談に譲り、中学時代に話を移そう。

先ず順序として、自分の通学路のことから話を始める。家（新富亭）を出て現在の若林食器店の角を左折し、福富町通を真直ぐに進むと、途中、左手に左右田薬店があった。この店はあの名門、左右田家の親戚だということだった。

宮川橋を渡って、尚真直ぐに行くと、今日の京浜急行、日の出町駅裏手の細い坂道に出る。この坂道を登るとき、いつも、同級の武林君が一緒だった。彼は、寿小學校長を父にもつ秀才で、組長（級長）をつとめていた。だから、試験期になると、自分はこの勉強家から、いつもハッパをかけられていた。

忘れもせぬが、二年生るとき、梶川先生の国史の試験がある日だった。

「君は桓武天皇の第三皇子の名を知っているかね」と僕に尋ねた。

夜の晩い寄席の息子に、そこまで勉強出来る筈のないことは、先刻ご承知で質問したのである。そのときは訳もなく口惜しかった。「安世親王」とか言っていた。

その後、彼が東大を卒業して、学位をとり、立派な技術者になったとき、彼に対して同じ質問を試みた。すると、彼はキョトンとして、「一体、何のことだい。全然覚えていないね」と答えた。しかし、当方は、昔の古疵のように、その親王様の名が未だにこの弱い脳にきざみこまれている。

昔、新渡戸博士が、「人の記憶力の弱さというのは、下らぬ、余計なことを覚えていくからだ」と言ったそうだが、自分の記憶力の悪いのは、どうやらこの古疵の後遺症ではなからうか。閑話休題。

例の坂（天神坂とかいう）を上ると、右手に左右田さんの邸があった。あれから、今の野毛山公園横の坂道を上って、動物園前からだら／＼坂を下りて、凹地おうちに出る。そして、また短い坂を上ること約三〇〇米程で、神中の正門に辿りつくのだが、時

折、あの動物園前を左に折れて、貯水所の柵に沿って、東小学校の方へ行き、神中の南側にある丘を下って、校庭に入り、校舎に達するのであるが、このコースでは、貯水所から流れ出る排水のせせらぎと、また、その流に鵲せせらぎが美しい、黄色い尾を舞姫のようにゆらめかすのがとても珍らしかった。下町育ちの僕の眼に映ずる自然といえば、自分の家の三階の窓から、隣の岡田さんの土蔵の屋根に、漆喰の破れ目から生えた金鳳花きんぼうげが風にゆら／＼と動く風情ぐらいのもだったから。

神中からの帰途は、野毛山公園の脇を通り、老松小学校を右に見て、野毛坂から商店街を通り、吉田町から伊勢佐木町一丁目の角に出て、右へ曲り、家に戻る。こうしたコースは、大正三年三月に卒業するまで繰り返した道中であつた。

神中を卒業したら、何処にしようかと、一応考えたが、当時、高等学校の入試は九月だったので、半年予備校通いをしなければならず、また、都落ちして、地方の高等学校を受験する気にもなれなかつたので、手近の東京外語のフランス語科を受験し、幸いに入學出来たが、この年の七月に第一次世界大戦が勃発、看板教授のジャクレー先生が、相当の御年配であつたにも拘らず、愛国心に燃え、故国の急を座

視するに忍びず、急遽御帰国になったので、自分もこの教科に対する興味を失い、直ちに中退して、同年九月、早稲田大学文学部英文学科に転入学することになった。東京への通学で、当然、横浜駅から新橋まで汽車通学をすることになったが、今日のようなラッシュがなかったので、車内で簡単な下調べも出来、また、交友との愉快な対話に興ずることが出来た。

一度もお目にかかったことはなかったが、原三溪先生の御曹子で、晩年トルコ名誉領事になられた善一郎君が、小生の友人であるように取り沙汰されたことがあった。原家の亀善さんといえ、父竹次郎の代から新富亭の地主として種々御厄介になっていたもので、あるいは、そんな推測をなさった方があったのかとも思う。

当時、吉田町から東京の虎の門女学校へ通っていた三人の評判娘がいた。呉服屋と、糸屋と、瀬戸物屋の娘達で、通称三人組と呼んでいた。こうした美女が同じ列車で通うということは、若い男の学生にとっては非常な魅力だった。でも、昔は今日ほどガール・ハンティングは盛んではなかった。

ここで、自分自身の懺悔話をしなければならぬ。

松ヶ枝町の裏通、若竹町にあった講談の定席若松亭の丁度真ん前に、関外の見番があった。この見番の箱屋さん（芸妓の三味線をお座敷に運ぶ人）で、留（とめ）さんという人の娘に、お徳ちゃんという眼のパッチリとした、とても美しい魅力的な子がいた。この娘は、梅ヶ枝町の福茂（ふくもと）登（のぼ）りという置屋の半玉で音丸という娘だった。

ある夏、新富亭に太神楽（たいかぐら）の海老（えび）一座が出演したとき、この一座との縁故から、このお徳ちゃんがよく見物に来て、舞台の直ぐ上の桟敷に陣取り、こぼれるばかりの愛嬌を振りまいていた。私は、いつのまにか、桟敷に咲いたこの花に心がひかれていた。

ある日、昼間、この音丸君が遊びに来た。新富の三階は、夏にはとても風通しが良く、涼しいので来たらしい。

自分は、生れて初めてこの可愛い女の子に話しかけた。別にこれという話ではなかったが、私の胸は躍っていた。初恋のお千代さんには、遂に一言も口がきけなかったのだが、この時は、私も中学の上級生だったので多少冒険心からでもあった。とにかく、正直のところ、すっかり彼女に参っていたのである。

しかし、それからしばらくして、この音丸君が新橋の藤村へ移籍して、めき／＼と売り出し、新橋七人組の一人となった。これを知った僕の落胆振りは大変なものだった。

ばあーやのお鯉さんが心配して、音丸君のブロマイドを二枚、何処からか貰って来て、僕に濟みませんといった顔付きで差し出した。

私は破れた恋のこの形見を、しばらく自分の机の抽斗ひきだしに入れておいたが……。

前述した東京通学の際、新橋で下車する度に、思い出が甦るのだった。でも、早稲田のフレッシュマンには、音丸君は、所詮、高嶺の花だった。

こうした失恋時代が終ってから、しばらくして、自分の心の空虚を十分に埋めることの出来る女性を発見した。しかも、目と鼻の先に……。

学校の方も無事、中学から大学へと順調に進み、どうやら卒業の目処めどもついたので、心に決めたその女性を娶めとることになった。しかし、その前に、一年志願兵として、東京上目黒の輜重兵しちようへい第一大隊に入隊しなければならなかった。そのため結婚式は一年後までお預けということになった。

除隊の日が、ようやく近付いたある日（日曜日）、先方の父親から面談したいので日比谷の松本楼まで来て欲しいと呼び出された。

それは、勿論、僕の熱意を確認するためであった。そのとき、私が「彼女を必ず幸福にします」と答えたことは申すまでもない。それで自分も安堵し、爾来、外出の折には、横浜に帰って、彼女の叔父さんのお宅（相生町辺で医者を開業していた）で、彼女との短い逢瀬が許された。でも、元来、慎重な自分は、いわゆる憶病（Chicken-hearted）チキン　ヘーテッドで彼女の手を握ることすら出来なかった。実に、われながらあきらめるほどであった。

世間の人は、伊勢佐木町の盛り場の新富亭という寄席の息子で、新富横町に二軒の芸者屋があり、その綺麗どころが、夕方になると、いつも新富の前の鈴木という帽子店と都屋という呉服店との間に入ったところにある「菊乃湯」というお風呂屋で入浴し、お座敷前のおめかしをするであろう白い襟足もくつきりと、軽い足どりで帰って来るのを幾度も見たであろう若者が、女の子の手も握れぬとは、真赤な嘘だと思うに相違ない。

初恋のお千代さんには声もかけられなかった。また、夢中になった音丸君には口はきいたが手は握れなかった。小学生の頃、今の不二屋の向隣、四ツ目屋のお幸ちゃや、新富の並びの「人形焼」屋のお千代ちゃん（初恋の人ではない）とは幼な馴染で、ザキの通りを、両手に花と、二人の女の子の手を引いて歩き廻ったことのあるお前は、一体どうしたのだと言われるかも知れぬが、あの場合は色恋沙汰ではなく、全く兄妹あにいもとのような気持だったらしい。落語「宮戸川」のお花、半七とは訳が違う。正直のところ、結婚前には、愛する彼女ではあったが、映画に誘ったことは一度もなかった。まるで床の間の置物のように大事に扱い、手に触れることが怖かったのである。

（四）芸能吹き寄せと父のプロフィール

昭和二年、オデヨン座で、初めてトーキー映画を観た。それは「ショウボート」という米国ミシシッピー河の遊覧船の映画であった。これは、観たと言うよりも聴いたと言う方が適当であろう。それ程その音響効果が素晴らしく、特に黒人の歌が良か

った。

フレッド・アステアが、登場するに至って、タップのリズムも面白く、ジンジャー・ロジャースとのコンビは満天下のファンの血を沸かせた。

このトーカー出現で、横浜電気館の世波田如水、オデヲン座の高岡黒眼、それに相撲常設館で、西洋史劇にその蘊蓄を傾け、東京の徳川夢声や生駒雷遊にも匹敵する素晴らしい説明で鳴らした藤波無鳴等のヴェテラン弁士達も流石に登場人物の発声に威圧され、後退せざるを得なくなった。

私が、活動写真と呼ばれた映画を、初めて見たのは、日露戦争の頃、わが家、新富亭においてであった。「旭まんまろ」という奇術師がうわおき（アトラクション）としての活動写真を上映した。勿論、短篇もので、時間にして、せいぜい十分足らずの短いものだった。

電気による映写ではなく、当時、縁日などで見かけた屋台のアセチレン瓦斯が光源だった。それが今日トーカー隆盛の時代となったのであるが、およそ、芸能部門の演劇、浄瑠璃、和洋音楽、落語、講談、万歳に至るまで、話芸一般の基本である

声の修練が重要であることは明白である。

あの浮世節の名人立花家橘之助が四歳で高座に上り、十三歳で真打というスピード出世に、人から恨まれて水銀を飲まされたために、声がつぶれたという伝説があるが、三絃に精進して、明治三十三年、浮世節の家元となり、「たぬき」の如き名曲を生んだ。

そのハスキー・ヴォイスには色気があり、また、それが魅力でもあった。間のとおり方が巧みで、あの愛嬌のある微笑は女優の三益愛子さんに似ていたように思う。

師匠は、私の母とは大の仲好しだったので、横浜来演のとき、師匠を横浜駅（現桜木町）に出迎え、二台の車（その一台には母と私が相乗りだった）を連ねて、伊勢佐木町の家へ帰って来たことを覚えている。

ところで、橘之助の「たぬき」は師匠の十八番だった。近年TV番組で、水谷八重子の橘之助、杉村春子の悟道軒円玉の女房、柳英二郎の円玉という配役で、川口松太郎さんの「風流浮世節」が放映されたが、水谷の美しさと、あの甘い声とは橘之助をちょっと美化した嫌いがあったが、杉村の円玉の女房には、いかにもそれら

しい演技が見られた。

水谷にしても、杉村にしても、女優が立派に座頭をつとめる昭和の時代に辿り着いたことを慶賀したい。だが、水谷も柳も共に故人になってしまった。

女の座頭といえ、東宝芸術座における山田五十鈴の「たぬき」も非常に好評だった。

とまれ、明治時代に女芸人の橘之助が落語の名人橘家円喬に一目おかせたということは真に驚くべきことであった。

橘之助師匠の美貌と至芸が聴衆を魅了し、あの永井荷風が若い頃、彼女の入門のむらく師匠の弟子になったことがあるという嘘のような話がある。

この不世出の天才、橘之助師匠の最後は不幸であった。それは、御主人の橘の圓たちはなまどかさんと京都の風水害のときに、気の毒にも遭難された。これは、確かに不幸ではあったが、彼女の存在が明治、大正の落語界、特に三遊派に大きな刺戟を与えた功績は大したものであった。

次には、ハマの芸能の話を試みよう。

横浜は東京から汽車で、当時五十分の距離でしたから、地方興行といっても、ほとんど本場と変りがなく、聴衆の耳目も肥え、出演者自身も相当に真剣だった。特に、芝居の場合は、歌舞伎でも新派でも、演目によっては、わざ／＼東京からファンが来たものである。

土地のお客様とお馴染になり、長期興行ともなると、俳優もお客様と多少妥協する場合があった。喜楽座での「山長」こと、山崎長之助の連鎖劇（活動写真と新派劇をミックスした）がそうであった。また、賑座の市川荒二郎が、ミーチャン・ハーチャンに人気があった。俗にハ、ハ、ハ、チ、芝居といって、輸出向けのハンケチの縁取り（fringe）をする女工さんのファンが多かった。

故六代目三遊亭円生師が、横浜に出演中観たこの荒二郎の「塩原多助」の演技を評して、「珍優」と言ったのは、恐らく、「どさ」巡りの臭味を意味したのであろう。でも、お客様は結構満足したので、安直なアミューズメントであったことは事実だ。

羽衣座の松尾次郎の新派劇も御多分に洩れぬ。この一座には吉田亮之助という若

手の女形がいた。彼は、元、大阪落語の「円頂派」と称して、全員坊主頭、圓師匠まどかが真打、落語と色物で、横浜の新富亭で大変好評を博したことがある。亮ちゃんはそのときの花形で、マスクも良く、踊りが上手だった。

喜楽座と横浜座の歌舞伎では、「歌舞伎」と銘うてる名題役者の顔を揃えた名狂言があつたので、私共の記憶に残っているものが幾つかあつた。

横浜座で二代目市川左団次が洋行帰りで、シエークスピア作「ヴェニスちぶさえのきの商人」を上演したり、先代の実川延若と市川猿之助時代の猿翁が共演した「乳房ちぶさえのき」や「妹背山女庭訓いもせやまおんなていきん」を観たことがある。猿之助の求女もとめは実にみずみずしかった。

先代の御所中村歌右衛門が新劇の菊池幽芳作「己が罪たまたま」で環に扮したのも珍らしかつた。これは確か喜楽座だった。

喜楽座で一番評判をとったのは、高島屋の市川左団次と松蔦しょうちようとの共演による「鳥辺山心中べやましんじゆう」だったと思う。

浪花節の定席には、喜楽座の並びに寿亭ことぶきというのがあり、相当常連もあつたが、浪曲がだん／＼と隆盛を極め、関東では、桃中軒雲右衛門、関西では、吉田奈良丸

という二大スターが出現するに至って、収容力の大きな劇場が選ばれ、雲右衛門は横浜相撲常設館、奈良丸は喜楽座で興業するようになった。

雲右衛門の豪快で男性的なるに對して、奈良丸は、いわゆる奈良丸節という歌謡曲めいた節まわしで人氣があつた。

私は、わが家の新富亭で一心亭辰雄の浪曲を聴いたことがあるが、淡々とした語り口は、当時、講談界の第一人者だった神田伯山の芸風を学んでいたように思われた。

伯山といへば、「清水の次郎長」であるが、広沢虎造に至って、全く伯山の演目をそのままに、独得の境地を開拓した。

義太夫の定席は吉田橋脇の伯父が経営していた富竹亭で、さすがに義太夫席としては東京の一流どころと比べても遜色のない席であつた。当時、人氣を呼んでいたのは、美声で知られ、艶物^{つやもの}を得意とした竹本朝太夫等であつたが、何といつても、大阪が本場なので、東京、横浜では、むしろ、娘義太夫が評判をとり、東京の本郷あたりで、学生の「どうする連」が騒いだというのは、今日の可愛い歌手に對する

声援の如きものであった。中でも、学士様の奥方になった竹本朝重あさじうは評判の美人であつた。

富竹では、「小土佐」という女義太夫（俗にタレキダ）が客を呼んでいたが、「呂昇ろしやう」の如き大物が来浜するようになってからは、横浜座で興行した。

この義太夫席の富竹で、毎年二月の霜枯れ時に、三代目柳家小さんが出演して、一年中での書き入れという大評判をとつた。

この三代目小さんは、人気の点では、三遊亭円遊に匹敵した。円遊の「ステテコ」などという「ア、チャ、ラ、カ」な余技すばなしに対して、小さんは天衣無縫の素噺に、常盤津で鍛えた美声を以てお客様を魅了した。しかし、富竹亭は義太夫の衰微と共に、明治四十五年遂に廃業の已むなきに至り、その結果、三代目の師匠が新富亭に出演することになり、それで一層の人気を博するようになった。

柳派の統領三代目が新富に出演するに及んで、東京の落語界は、柳、三遊の兩派の芸人が新富亭でハマのご鬚かみ筋の御機嫌をとり結ぶこととなった。大正の初期までは、一ヶ月上かみ、下と二回興行で、一月には都々逸坊扇歌のトリしもだったが、しば

らくして、三升家小勝となり、お正月の人氣を沸かせた。扇歌の音曲嘶に対して、小勝の奔放な江戸前の落語が非常に受けた。彼がマ、ク、ラ（語り出しの小話）をふる時、「小さんとか小勝というのは美妓びぎの名前なのに、「コカツ」と言わねーで、シ、ウ、カ、チと言うんだから、嫌になっちゃうよ」と云って、先ずお客を笑わしたものだ。

私が神中の一年生ぐらいのとき、師匠が得意になってパリの大博覧会に行った話をするのを直接に聴いたことがある。

「綺麗な女の子を多勢連れてね」と。僕はびっくりして、聞き耳を立てたが、結局、師匠は、若い頃、箱屋として芸者衆の三味線を運ぶ仕事で同行したらしい。その芸妓連中が博覧会で日本舞踊を公演したのである。

この小勝師匠の一座に、地元の昔々亭桃太郎という音曲師が、夜になると、助っ人として、福富町の自宅から新富にやって来る。彼は元氣のいい音曲嘶と、「問答」と称して、お客様との滑稽なやりとりをする。例えば、「一枚でせん（千）べいとはこれ如何に？」とお客様に問われ、彼が「一つでもまん（万）じゅうというが如

し」という駄洒落で答える。故三波伸介君の「笑点」におけるあれであった。この桃太郎さんは、平素は判子屋はんこをしていた。この中入前の人気者が自分で一座を組んで東海道筋へ出ると、東京の真打でも苦戦したというのだから、地方には有難い臍筋があつたようだ。

若竹町の若松亭は講談の定席であるが、このトリをつとめる先生方は、神田伯山、猫遊軒びようけん伯知、松林しょうりん伯鶴、小金井蘆州、宝井馬琴、一龍齋貞山等の錚々たる連中だったが、若松に出演のときには、色物席への助すけとして新富の高座に上つたものだ。中でも、当時八町荒しと異名をとつた伯山の人気は大したもので、俠気いなきなこの先生が釈台しゃくだいを前に、髪を撫で上げ、張り扇をたたいて語り出すと、御客様が思わず前に乗り出す。しかも、演目が「清水の次郎長」とか義士伝の「堀部安兵衛の高田の馬場」となると、未だ中学生だった自分なども高座の前に釘づけとなつたものだ。

新富亭は色物席だったので、こうした講談はもとより、義太夫、手品、尺八、剣舞等、いわゆる色物、ヴァライエティ・ショウがあつた。米国では寄席をヴォーデヴィル・シアターというが、英国ではヴァライエティ・ショウと呼んでいる。

伊藤痴遊、本名伊藤仁太郎先生の新講談はしやくだい釈台を使用しないで、テーブルを前に置いての講演式のもので、しば／＼新富で昼間に独演会を催した。先生は横浜小学校の出身で、私の親父の先輩であった。氏が晩年、東京市の市会議員として活躍したことは御存知の方もあるでしょう。

痴遊先生が得意にした読み物は明治維新に活躍した人物を題材として、講談界に新風を吹き込んだ。唯に講談界ばかりでなく、彼の題材とした明け行く明治日本の歴史は一般の歴史的読み物、特に映画の素材としても役立った。

次には、横浜と縁故の深かった落語家諸君のことを話してみよう。

品川の師匠こと橘家円蔵が、その愛弟子小円蔵（五代目三遊亭円生）及び円好（六代目三遊亭円生）と共に、横浜の新富亭に出演したことは当時の人気興行の一つで、大正十一年の二月に出演中、この大師匠が病に斃れ、円好が二、三日ダイバネ（代理としてトリをつとめる）をしたことが、故六代目三遊亭円生師の前出の「寄席切り絵図」に記されている。

この品川の師匠が没して、当市南区弘明寺の境内、観音堂の傍に、施主中山千代

さんによって建立されたその碑があります。碑文は、三代目柳家小さんの書です。因に、中山千代さんは故人円蔵の愛人で、横浜関内の名妓でした。

ハマと縁故のある芸人として、新内の富士松加賀太夫と、八代目桂文楽とがある。共に故人となったが、加賀太夫は新内の名人で歌舞伎で「弥次喜多」が上演されるときには、必ずと云っていいくらい、加賀太夫の出語りがあった。元来、新内の流しというのは遊里（浦里時次郎の「明烏」あけがらすの如き狂言の）で聞かれたものだが、大正の末期から昭和にかけては、ヴァイオリンの伴奏による流行歌に圧倒されてしまったようだ。

八代目の桂文楽は、当市の多勢商店に小僧奉公をしたことがあった関係で、若い時分からハマにはお馴染が多く、柳派の頭取であった五代目柳亭左楽の一門として、新富では最も人気のあった落語家で、その得意とした廓噺の中、特に「明烏」の如きは天下一品だった。

地元横浜出身の落語家として最もユニークな存在は柳家三語楼でした。彼は山手のセント・ヂョセフを卒えて、浜の天狗連と称するグループからスタートして、本

職の嘶家となり、新傾向の落語を以て若い世代のお客にアピールした。特に、東京では、本郷で、英語まじりのヒューマアが大学生の嗜好に投じ、彼の人気には当時並ぶ者がなかった。それで、掛け持ちが忙しく、自動車を抱えるまでになった。当時、自家用車を持ったのは彼が初めてであった。従来、真打の中には掛け持ちが多くなると、人力車を使ったものだが、大正の初期には自動車は未だ珍しかった。

この三語楼と同期の真打で、ハマ出身の落語家は五代目春風亭柳枝である。彼は通称、ゴミ、六の息子で、瘦軀鶴の如く、眼のギョロツとした男であるが、温厚で、気っ風がよく、仲間うちの評判がとても良かった。得意な嘶に「桃太郎」というのがあった。子供を寝かしつけようと、桃太郎の昔嘶をきかせたが、子供から半畳が入り、あべこべに話をしてもらい、寝かされてしまふ。そして子供が「親なんてタワイのないもんだなあ」がサゲになる、大柄な柳枝の天真らんまん話芸が受けたのであろう。

ハマ出身のこれら二人は、前記天狗連と称する素人であったが、年末に新富亭を一晚借りて、その自慢の芸を披露して、着々腕を磨いていた。このとき、義太夫の

方にも素人放れの人が二、三出演したが、中でも真金町の遊廓、勢州楼の若主人某の義太夫は全く玄人くろうとハ、ダシハだった。こうした素人で今日のオ、デ、イ、シ、ヨ、ンのようなものを受けて芸人になる者がいた。

「やなぎ」という美声の音曲師は、元郵船の船員だったが、新富でその音曲のテストをして貰って高座に上り、東京の落語界でも相当の売れっ子になった。小柄で愛嬌のある男だった。彼は年齢の割に頭髮が薄く禿上っていたので、気になるらしく、都々逸のマ、ク、ラハによく、「金も名誉もいらないけれど、わたしや頭に毛が欲しい」と歌ってお客を笑わせていた。

横浜に縁故があると云えば、「軍鶏しよも」という綽名の古今亭志ん生は、前名を雷門助六しよめといって、市川団蔵の声色が得意だった。師匠は吉田町の入口に近く、左側の確か二軒目にあった山田時計店の御主人の兄さんであった。昭和の名人と云われたあの志ん生師匠は幾度も名前を変えているので詳つまびらかにしないが、「蛞蝓なめくじ」長屋の住人として貧乏が売物だったが、飄逸な話振りと、間のとり方の巧みさを以てお客を笑わせた。特に「居残り佐平次」とか、「火焰太鼓」などは緩急自在な話芸であ

った。彼には馬生、新朝という現代落語界において実力のある二人の有為な真打が息子であり本当に幸福だったが、残念なことに、惣領の馬生が最近癌のために亡くなった。そのため志ん生の後継者と目される新朝の責任がいよ／＼重くなった。彼の話芸は、兄馬生の老成した地味に対して、新鮮で派手、廓嘶などは、故八代目桂文楽師に似たところがあり、また、亡くなった六代目三遊亭円生師のような正統派で、近頃めき／＼上達した三遊亭円楽君と共に次代を担う斯界のホープと云えよう。

昨年亡くなった林家彦六（前名正蔵）師匠は、そのネタの多かったことは比類のない嘶家だったが、如何にも語り口が地味で損だった。明治時代の正蔵は怪談嘶で一世を風靡したが、晩年は余りにも高齢のため、お客には通じなかった。「横浜今昔」の中で、金川利三郎氏（市内磯子在住の元落語家、芸名古今亭志ん馬）の談として、「新富の高座で、正蔵師匠が高齢のため耳が遠くなり、お客様に自分の話を通じなかったので、大爆笑を浴びせられたが、御当人は自分の話が受けたと勘違いをした」というエピソードがある。事実、そんなことがあったらしい。なにしろ、そのとき正蔵師匠は九十何歳という高齢でしたから。

現落語協会々々長五代目柳家小さん師匠は、確かに当代随一の落語家で、円満な人柄と剣道で鍛えた身心をもって、悠揚せまらざる貫禄は三代目の田舎の爺さん然たる風貌と好対象であるが、五代目の師匠の「三人旅」や「傘碁」の如きは三代目に優るとも劣らぬ味がある。但し、三代目の魅力と云えば、「うどん屋」のようなトボケタ人物の咽のどから常盤津で鍛えた美声の投げ節が飛び出す意外性だった。

柳派の総帥五代目小さん師匠に対して、三遊亭円朝や橘家円喬以後の名人として大成したのは故六代目円生師匠であつた。新富亭でデビューしたとき、おふくろさんの三味線で義太夫を語った「豆まめ仮かな名な太夫だゆう」の幼少時代からの彼の知己である自分は、師匠の努力を大いに評価したい。ツナギに「箱根山」という小噺をしてから落語家となり、遂に師匠の円蔵を襲名、更に六代目円生という大看板になるまでには、品川の師匠の薫陶はもとより、義父の先代五代目のバック・アップのあつたことは事実だが、彼自身の奮闘努力は並大抵ではなかった。研究熱心な彼にとって、何と云っても大きな刺戟となつたのは橘家円喬という名人の目標があつたからだ。

さらに、戦時中、古今亭志ん生と共に満洲で苦勞した尊い体験は、この二人の芸

の肥料こやしになったに相違ない。円生師匠の得意な演目は数々あるので枚挙にいとまがないが、筆者には「文七元結」における三人の女性、左官長兵衛の女房、娘のお久、それに吉原佐野槌の女将の描写などが印象に残っている。

あの品の良い円生師の風貌と愛嬌とは芸人にはこの上ない財産であった。

この円生師の名著「寄席切り絵図」では筆者の親父のことが詳述されているが、また、八代目桂文楽師匠の「あばらかべっそん」という自伝中にも、私の父のことが書いてある。この両師匠の本は共に「青蛙房」から出ている。尚、前述した金川利三郎（元古今亭志ん馬師）氏が「横浜今昔」の中で、「横浜一番の寄席新富亭」の主人、父竹内竹次郎の人物像を紹介しているので、ここにちょっと引用すると、「私が二十四歳の大正二年二月、上方落語一座として一行十三人で横浜にやって来て新富亭で大いに熱演したわけだ。」

当時伊勢佐木町の勧工場かんこうば（うちで貸していた三軒の商店）の二階が新富亭でハマ切っの寄席でしてね。なんでも明治時代には土蔵づくりの「丸竹」と「富竹」の両亭がハマの寄席として人気をさらっていたものだそうで、富竹が新富の前身とい

うわけでさ、当時は映画なんかない時代ですから寄席は大いに発達して伊勢佐木町には浪花節専門の寿亭、女義太夫専門の新寿亭、講談専門の若松亭をはじめ、神奈川の青木亭や、戸部、亀の橋にもそれぞれ寄席がありました。この中でも、新富亭の主人で竹内さんという人は実に誠実な人で芸人の間でも話題の人でしたね。それというのが、寄席というところはおおぜいお客さん方に楽しんでもらう場所だからと、いつもきれいにしておかなければいけないという主義の人でしてね。不潔なところほど主人が仕事をせにやいかんといって、毎朝早くから便所やゴミ箱のそうじに当り、実に偉い人でしたよ」と。

金川さんが筆者の親父について御紹介下さいましたので、息子から見た父のプロフィルを少々描いてみますと、父は実に温厚な人で、とても席亭の主人とか興行師によくあるやくざっぽさの微塵もない人でした。

若い頃、箱根へ湯治に行ったとき、先代の松島屋（今日の片岡仁左衛門丈の父）の我童と間違えられたくらい的美男でした。私共兄弟の嫁達から、「お父さんは美男でしたわね」と口癖のように云われると「参った!!」と二の句がつけなかった。

新富横町の鈴床^{すずどこ}へ散髪に行った私は、床屋の親方が私の顔立ちのことは云わず、「頭の形はお父さんそっくりですね」と云われて、やや満足したものです。

父は怒っても手を上げることは絶対にしませんでした。怒ったときは、じっとこらえているらしく、私の肩に手を置いて、私の眼を熟視^{みつめ}るばかりでした。

父の信心深さは定評があり、朝夕神棚に燈明を供え、毎月久保山への墓参は欠かしませんでした。それに川崎の大師様へ参詣するのが習慣でした。その際、私がお伴を仰せつけられたのですが、私の場合は信心ではなく、内心、参詣が終った後で、川崎のどこかの料亭で御馳走になるのが楽しみだったんです。春の頃ですとその料亭の中庭にある梅の木が障子にその影を落とす閑静な風情を賞しながら僅か一合のお酒に日頃の苦勞を忘れて御満悦の父を、子供心にも嬉しく思ったものです。こうした父子の団欒は、暮の押しつまった頃、新富が休業のとき、伊勢佐木町通の牛肉屋などでも経験したことがあります。

吉田小学校の高一を卒え、神中の入学試験を受けたとき、その第一日目のことでした。習字の試験に必要な毛筆を家に忘れてきたことに気付き、すっかり狼狽^{ろうばい}して、

「これで試験も駄目か」と諦めかけていたとき、父が伊勢佐木町の家から俵屋くろまに頼んで急ぎその毛筆を届けてくれたときは、「本当に助かった!! お父さん有難う」と思わず手を合わせて父に感謝した。父兄会にもよく出席してくれました。父は実に義理堅い人で、明治三十二年の大火で新富が焼け、翌年再建に当って莫大な借金をし、その返済には非常に苦勞をした。またあの日露戦争による打撃で、家庭の暮らしも苦しく、常食に白米をとることも出来ず、「南京米」(broken rice)を食べることがありました。

松ヶ枝町の左右田銀行に「取りつけ騒ぎ」のあった最中に、父は銀行を信じて、預金に行ったことを聞かされて、僕もびっくりしたことがありました。

落語家がよく云う「三どらぼんのう」、つまり、飲む、博ちつ、買うの三道楽には縁がなく、飲むのはやっと晩酌に一合、賭け事は大嫌い。女は向うから言い寄っても相手にしなかった程の堅物でした。この仏様のような有難い父に対して、私は生れて初めて嘘をつき、父から金二十銭を瞞だんまし取って、Sという友人にそのかされて、阪東橋を渡った向側の空地にあった貸馬屋へ行き、馬に乗ったが、それも時間

の大半はその友人のために馬を占有され、自分は徒に馬場の片隅で彼の戻って来るのをべッをかきながら待っていたこと、しかも時間超過で超過料金を払えと云われ、恐ろしくなって逃げ出し、結局、その馬場の近所にあった第二高等小学校（男子校で、今日の尋常五、六年のみ）に通うために、わざわざ廻り道をしなければならなかったことは、拙著「寄席の息子と英文学」中の「思い出の記」で述べた通りである。

父を欺いた^{あざむ}のは、ちやうど父が痔を患って尾上町の指路教会に近い病院に入院中でのことだった。このとき、私はその病院に父を見舞って、しおらしくも、「お加減は如何ですか」と先ず御見舞の言葉を述べ、それから、おそろおそろ、「実は、地理の参考書を買いたいので、二十銭頂きたいのですが」と言ったものである。父はちやうどお昼の食事に運ばれたお粥^{かゆ}に箸をつけようとしていた。その粥の中には真紅な梅干が入っていた。いまだにその紅い梅干がこの眼に浮かんで来る。爾来私は嘘はつくまいと決心した。

自分は二男という立場で父親の面倒は兄夫婦にお願いして、結婚後は、自由に振舞い、関東大震災の直後、妻と生れたばかりの恵美子を信州の叔母のところに預け

て、アメリカのシカゴ大学と、イギリスのロンドン大学とに留学したが、その途中、父の健康がすぐれぬという報に接し、一年有余で切り上げ、帰朝することになったが、正直に云って、孝行らしいことは何一つ出来なかったことを深く恥じている。でも、せめて無軌道に走らず、亡父の生涯のように、その誠実さを鏡として進みたいと思っている。

欧米の遊学から帰朝した自分は、大正十四年七月、元御厄介になった恩師鈴木達治先生を学校長に戴き、「名教自然」という独自の教育方針を実践する神奈川県立商工実習学校の教壇に帰り咲き、当時ロンドン大学から派遣されたハロルド・E・パーマー氏の唱道する発音記号の使用と、朗読法を重視して英語教授の道を邁進し、また、好きな野球を生徒と共に楽しむ日々を送り、ここに自分の安住の地を漸く見出すことが出来た。

(四) お祭騒ぎと戦争への道

芸能の話題から賑やかな祭礼の思い出を語ろう。

伊勢山の皇太神宮は、横浜港と下町一円を見下す形勝の地に位し、年頭には、家内安全、商売繁昌を祈願する市民にとっての守護神を祀る神社であるが、そのお祭は、それ程派手ではない。でも、伊勢佐木町から吉田町、野毛にかけての商店街が提灯を吊るして景気を添え、縁日の露店などの賑が子供にぎわいの眼を奪った。

下町の者にとっては、お参の宮、日枝社の祭礼が一番盛大で、宮司が乗馬で禰宜等をひき具ぐして、伊勢佐木町通を練り歩く風情は一種のページェントで、豪華な神輿や小若連の樽神輿に至るまで繰り出して、景気がよく、山車だしを引っぱるのは老いも若きも一体となって、野球の応援顔負けの勇ましさであった。平素は気がつかなかったのであるが、町内にこんなに多勢の若い衆がいたのかと怪しまれるくらい、ねじり鉢巻に、揃いの浴衣で、汗ぐっしり、お祭騒ぎとはよく云ったものである。近年、伊勢佐木町有隣堂脇に展示される高村光雲作の文化財的神輿は素晴らしいのだが、あれは筆者の親父達の町内会が、可成の寄付をして造ったもので、おそらく、あの狭気いなきな料亭「あらゐ」の旦那の肝入りだったのであろう。平常、この神輿は県立博物館内に安置されているそうだ。

弁天様の祭礼になるとスケールが小さく、特筆することもないが、空地での見世物興行はどのお祭でも共通のものだが、サーカスの一団が来るときは、洋の東西を問わず、子供達は大変喜んだものである。「The circus is coming」という歓声は子供の口から聞くのが如何にもふさわしい!!

近年全国到る所で、お祭がブームで、北は北海道から南は九州、沖縄までも、四季を通じてその土地特有の催し物がある。

地方色豊かな催し物は、観光客を誘致して金儲けになっている。この傾向は世界的で、地球上にこの波の打ち寄せぬ所はない。それゆえ、世界の人民がうかされる一種の熱病である。私が永年住んでいる南区辺りでも、お祭景気で沸き立つ。僅か二、三日のことではあるが、このお祭熱はまるでハシカのように高い。「ワッショイ、ワッショイ」の掛け声は鬱憤の発散なのであろう。でも、私の耳には「ファッショ、ファッショ」と聞えて来た。

近頃、鷹派の政治家達がわが国の憲法を忘れて、一層右傾化しつつあるのは憂慮に耐えない。痛ましい敗戦が何に原因していたかを忘れ、盗人にも三分の理

ありで、自己の犯した罪を陳謝せぬばかりか、反省することなく、被害者に対して居直るような彼等の言動は正に「やくざ」のそれである。これは中近東の紛争にも見られるが、第一米ソの対立の如きも、これが円満な解決策は、「お互に武器を捨てよ」という神の声に耳を傾ける以外には絶対にあるまい。

わが国が経済大国になったことを誇り、隣国との友好を忘れると孤立することになるのは必定である。筆者はお祭騒ぎが、*フ、ア、ッ、ン、ヨ*、的煽動により、平穏な地球上に一大旋風を捲き起すことを恐れている。敗戦の苦難を乗り越えたのは国民の忍耐によつたのである。行政整理にしても、政治倫理の肅正にしても、官民一体の忍耐なくしては達成される筈がない。国鉄の改革に一大メ、スを加えたり、官庁の浪費を先ず廃することが望ましい。徒に米価の引き上げや、賃上闘争にうき身をやつし、ストを以て唯一の武器と心得、怠惰心を増長させるのでは、この苦境を突破することは到底出来ない。また、国債の乱発を以て景気の立て直しを図らんとする悪循環の繰返しでは、一体、経済破綻の責任は誰がとるというのだ。落語の「湯屋番」のサゲではないが、最後の客は裸足^{はだし}になるより仕方があるまい。

落語に「担ぎ屋^{かつ}」というのがある。縁起をひどく気にする人の話である。商売によつては随分縁起を担ぐ。落語家は「すずり箱」と云わないで、「当り箱」と云う。墨をするのするという言葉をいみ嫌う。「戸をはずす」のはずすが禁句である。この落語、「担ぎ屋」の主人公、呉服屋の店主は大の四^シの字嫌い、四文^{シモン}を「ヨモン」と云つて貰いたいのである。四は死に通ずるからである。

「お宝^{たから}、お宝」と売り歩く、初夢によい夢を見るといふ、七福神を描いた「宝船の縁起物」を売る男が四の字嫌いのこの店の主人に買つて貰う苦心の対話である。

「旦那様はニコニコとお笑いになつて、まるで恵比須様のようです」と先ずお世辭を云い、次に奥の方から顔を出したお嬢さんをちらつと見て、「まるで弁天様のようですね」とおどしやをかける。そして、「お宅は七福神がお揃いですなあ」と云えば、店の主人は、「俺^{わし}が恵比須で、娘が弁天じゃ、二福じゃないか」と問いつめると、宝船屋は「でもお宅の御商売が呉服（五福）ですから」といふサゲになる。人を騙^{だま}すことを担ぐとも云う。神輿を担ぐのは神聖な御本尊を持ち上げることであるが、世間にはその御本尊が何であるかも知らず、ただ持ち上げ、祭り上げる者

がいる。この連中の掛け声の「ワッショイ、ワッショイ」が「ファッショ、ファッショ」になるのである。デマゴーグが民衆をうまく煽動するのは御存知の通りであって、これはギリシアの昔からデモステネスの雄弁によって代表されるが、沙翁劇のジュリアス・シーザーにおけるアントニーも確かにデマゴーグだった。今日の政治家は、左翼は勿論、右翼の連中にも、このデマゴーグが多い。日本を敗戦に導いた巨魁^{きょかい}は軍部のデマゴーグ達だった。錦の御旗を捧持する側近共が国体の護持を忘れたのである。「勝った、勝った」と浮かれて戦勝の美酒に悪酔した日本人の大多数が担いだ積りの「大東亜共栄圏」というどでかい神輿に振り廻されたのだ。つまり、担いだ積りの自分達が実は担がれていたのだった。

(六) ハマの名士

担ぐ^{かつ}という言葉は悪いが、担う^{にな}というとは責任をもつ意味になり、そこには一種の誇りがあるようだ。

私共浜っ子が生れ育った横浜は開港以来、官民の協力によって発展したのである

が、特に多大な貢献をした人々のあったことを忘れてはならない。

神奈川新聞刊行の「横浜商業会議所創立百年史」を飾る「横浜経済物語」は近頃の好著で、筆者は市民の一人として、この刊行に対して大きな拍手を送りたい。

この物語中の名士を直接間接に知る機会を得た筆者は、これ等の人々を追憶し、また、その他の交友知己で、この取るに足らぬ私を激励して下さった方々の思い出を語ることをお許し頂きたい。

大谷嘉兵衛翁には直接お目にかかったことはないが、「横浜経済物語」中でも詳述されているように、製茶業の代表者としての翁については仄聞するところが多い。昔、本町通辺りに、お茶の倉庫があったのであろう？ 少年時代に、海岸通の方へ行ったとき、香ばしいお茶の匂いが鼻を刺戟し、また、俗にお茶場と称する所から女工さん達の歌う声が聞えてきた記憶がある。

野毛の御不動さんに、幼児が足を踏みはずして転落せんとするのを、その母親らしき婦人が無事にこの子を受けとめている絵が掲げてあったが、これは如何にも御不動様のご利益だと子供心に強く感じたことがあった。あの石段を登りつめたと

ころの左側に茶店があった。参拝客はそこで一休みして、甘いものとか、おでんを食べながら港や山手方面を見渡すのが横浜市民の楽しみの一つだった。

そこから伊勢山の皇太神宮への緩やかな坂を登りかけると、右手に製茶翁大谷さんの銅像があるのが眼にとまる。明治生れでも、当時少年だった私共は、直接、翁の風貌に接する機会が稀であった。どうやら大谷さんの存在は銅像としてであって、伊井掃部頭かもんのかみと同列になったようである。伊井大老は万延三年三月三日に、水戸や薩摩の浪士達によって桜田門外で殺された。近頃テレビで視聴率の高い水戸の御老公が西山荘でこの変事をお聞きになったら、「愛国心も良いが、程々にして貰いたいものじゃ」と苦笑なさったことであろう。

原善三郎さんのことは何も知らぬ。写真でお目にかかっただけ。二代目の原富太郎（三溪）氏には、筆者が横浜高工教授時代にお目にかかったことはあるが、お話しする機会を得なかった。神中の先輩で、私共の学校の長老教授だった橋本先生や、同じ神中の先輩で、西洋美術史、特にボチチェリの研究で世界的に有名な矢代幸雄氏は、若い頃から美術愛好家としての原さんの知遇を得て、原家に入入りしていた

ようである。横山大観其他、優れた日本画家のパトロンであった三溪先生の励ましにより、矢代先輩が美術評論家としての地位を築き上げたことは容易に想像されるが、あの有名な印度の哲人タゴールが来日して、西に富嶽を望む三溪園の一室にしばらく滞在したとき、未だ若かった当時の矢代さんが通訳をつとめたところである。

原三溪先生御自身も立派に絵をお描きになり、また書道にも長じておられた。

私共の恩師煙洲鈴木達治先生の「名教自然」碑には徳富蘇峰先生の撰文を三溪先生がお書きになっている。この名教自然碑は、元、弘明寺の横浜国大工学部前にあったが、今日では保土ヶ谷区常盤台の同大学工学部前に移されている。

原三溪先生は実に温厚なイギリス風の紳士でしたが、この原さんを補佐したのは中村房次郎氏であった。中村さんは横浜政界の大御所になられた実力の持主で、スポーツで特に有名なオリンピックの日本代表者平沼亮三氏はこの中村さんの後継者となり、政界に進出し、横浜市長として活躍された。

「横浜経済物語」にも紹介されている横浜復興の立役者となった井阪孝氏の手腕

は高く評価され、後に、東京市の商業会議所会頭として辣腕をふるわれたその実績から成程と首肯されるであろう。奇しくも、この原、中村、井阪の御三方はわが横浜高等工業学校が大正九年四月に創立されたときの維持員であり、われらが恩師、自由教育者として異彩を放った名校長鈴木先生の良き理解者であった。

鈴木先生の学校長時代に、特別講義として名士の講演をしば／＼学生に聴かせたものだが、特に工業を専攻する学生のために、石橋湛山先生とか、毎日の副社長の岡先生を煩わして経済学の特別講座を用意されたりした。また、卒業式においては各界の名士をお招きして記念講演をして頂いた。

鈴木先生が「横浜今昔」の中で、その名士として、高橋是清、後藤新平、高田早苗、金子堅太郎、荒木大将、徳富蘇峰の名前を挙げておられる。その中で、筆者の母校、早稲田大学総長だった高田早苗先生のこと強く印象に残っている。と云うのは、当時わが横浜高工の卒業式は三月十五日に挙行された。

高田先生が演壇に起たれて、開口一番という前に、壇上のグラスを取り上げようとしたとき、どうしたはずみか、そのグラスが床に落ちて割れた。聴衆の皆さんも

そうだったろうが、私は特にハットした。卒業式というお目出度い席で……。何か不吉な気持が私の胸底をサット走った。それは三月十五日は、あのジュリアス・シーザーがキャピトルで暗殺された日だぞと、「沙翁劇第三幕」のあの場面が私の脳裏を稲妻のように掠めたからである。私がこうした縁起を担いだのは、恐らく、当初から母校の総長の講演が無事に終わりますようにと心に念じていたための心理作用だったようだ。

上記の名士中に洩れているが、浅野総一郎氏が関東大震災の後、バラックの講堂で、八十歳を越した老人とは思われぬ元気な声で、「五十、六十は未だ鼻たれ小僧だ」というような挨拶をされたことがあった。若い頃に苦勞を重ねたこの老人が、いよいよ功成り、名遂げて、浅野綜合中学校を經營して、例のアメリカのゲリー・システムを採り入れて、新しい進歩的な教育に乗り出して間もない頃だった。筆者はたま／＼大震災の翌年、米国シカゴ大学に留学中、関東学院の初代院長の坂田祐先生と、神奈川県の内務部長大島さんと一緒にシカゴ近郊のゲリーという町へこのシステムによる学校を見学に行ったことがあったので、浅野翁のお話を興味を

以て拝聴した。

私は神中に入る頃から海外発展を夢見て、押川春浪の冒険小説や、実業の世界などという海外渡航の記事が載っている雑誌に興味がひかれていたので、貿易新聞社長富田源太郎さんの商業英会話の本などを愛読した。また、お伽噺の本家ともいべき巖谷小波先生が団長となり、わが国の実業家連中を率いて見学旅行のため、アメリカへ行かれた時の珍談奇談についての記事を面白く読んだ。その記事の中に、団員の一人が桑港の銀行で小切手をキャッシュにして貰おうとした時、難儀をしていたのを見て、英語の全然通ぜぬわが横浜の銀行家左右田金作頭取が手まねで見事介添え役の目的を果し、銀行家の面目躍如たるものがあった。「流石に餅は餅屋だ」と小波先生が讃辞を呈したこの記事を読んで、私はほほえましく思った。

忘れもせぬが、この左右田銀行の松ヶ枝町支店の隣に岡部屋という土蔵構えの立派な呉服屋があった。私は幼い頃、よくこの店へ遊びに行き、泊ったりすることがあった。ある晩、あまり自分の家が恋しくなつて、「帰りたい、帰りたい」と駄々をこねて、遂にその店の番頭さんにおんぶして貰って帰宅したことがあった。どう

してこの呉服屋へ頻繁に行つたのか分からなかったが、どうやら、その家には子供がなかったので、私を養子にしたかつたらしい。その後、その店では養女を迎えた。その娘は非常に器量よしで、フェリス女学院に通つてゐるとのことだった。

どうも自分は呉服屋とは縁があるらしい。自分の家内も呉服屋の娘である。「われはもや安見子得たりみな人の得がてにすとふ安見子得たり」と鎌足公氣取りで得意になつて迎えたその愛妻も今はこの世にはいない。この妻の実家は伊勢佐木町通り満利屋洋品店の一軒おいた隣、新富亭（今日のハマ楽器店のところ）の筋向いの都屋呉服店であつた。

新富亭と同様、㊦系統の富竹亭は吉田橋際にある義太夫専門の寄席で、伯父が経営してゐた。「横浜絵はがき」にある通り、明治四十五年に廃業した。あそこの土地は、元四百坪あつたが、伯父が相場に手を出して、借金のかたにとられてしまつた。あの土地は、祖父竹蔵が、高島嘉衛門という豪商がある事件のため入獄したが、出獄に当り、身元引受人となつた祖父の労を多として高島さんから貰つたものだ。

高島さんは江戸時代からの実業家で、横浜まで進出したが、晩年は易断えきだんで天下にその名を轟かせたことは周知の通りである。

私共は少年時代に神奈川の高島山まで足を伸したものだが、豊頭寺ぶげんじへお花見に行ったのもその頃だったと思う。

桜と云えば、横浜公園の桜のことが先ず第一に私の頭に浮かんで来る。

吉田小学校の高一の時、恩師関根源三郎先生に引率されて、権三橋ごんぞうを渡り、松影町を経て、花園橋から公園入口の方へ駈足で行くのだが、短い体操の時間を利用して、桜の植え込みの多い狭い空地で野球をやった歓喜がそもそも私を野球ファンに駆りたてたのである。

(七) 野球漫談とハマの文士

野球好きの私も、神中時代には敢えて野球部に入らなかった。というのは、家の商売が商売だから新富亭がハ、ネてからでないかと静かに、ゆっくりと勉強するなど思っても及ばなかった。だから年末試験で徹夜をしなければならぬときは、親父の寝

ている枕元で頑張った。三学期の寒い冬の夜など、火事早い下町で出火などのあった場合、ジャン／＼という半鐘の音には、まるでアッパー・カットを喰らったようにたじ／＼となった。

当時の神中では進学のための補習授業などは余りやらなかったもので、平素の勉強は非常に厳しかった。そんな訳で、野球部には入らず、有志の者とABCという倶楽部を組織して強制されぬ野球を楽しんでいた。

当時の横浜ではY校が断然強く、超中学級だったから、他の学校はほとんど相手にならなかった。しかし、神中にも、その数年前には早大に進んで活躍した深堀、増田、八幡の如き名選手がいた。増田は捕手、八幡は外野手、深堀は三塁手で主将をつとめ、ハワイ遠征では、この深堀が大活躍したという記事を雑誌などで読んだ記憶がある。

この三羽鳥は当時押川春浪や小杉未醒等の文士や画家の連中から成る天狗倶楽部とも交流があったらしく、その連中の仲間に入って相撲をとったりしていた。

その後、岡野公園の御主人岡野金之助氏の御曹司岡野の健ちゃんは慶大野球部で

投手をつとめたが、その健ちゃんの後輩で、筆者が二年生るとき、五年生だった伊藤周さんは神中の生んだ名投手の一人で、当時横浜倶楽部のエースだった。また、私よりもずっと後輩であるが、早大で活躍したサウスポウの多勢正一郎君も神中出身の名投手だった。

神中名物で、毎年五月の運動会には、最後を飾る学年対抗の選手競争があった。自分は二年の選手としてこの伊藤周さんと八百米を走ったことがある。

岡野の健ちゃんの弟、省吾君も野球の名手だったが、慶大に進んでも野球部には入らず、専ら横浜の社会人野球のために貢献した。

彼は実に温厚な紳士で、頗る社交的すしやうなスポーツマンとして皆から親しまれた。彼の同窓で神中時代捕手として鳴らした鳥山数衛君は医師として信望も厚かったが、^{ジエ}J倶楽部の功労者の一人であった。私はこの岡野、鳥山両君が合同で結婚披露宴を相生町の料亭八百政で催したとき、御招きを頂いて出席したが、真に珍らしい友情の溢れた宴であったことを覚えている。しかも、この会場の八百政の養子というのが私共神中第十四回卒業の同級生畠山君の家であったことも不思議な縁だが、その

後、私共十四回の会を、幹事二宮謙君（遊撃手として活躍した）のお世話で、この八百政で催したことがあった。そのときの出席者は十三名だったが、二宮君を含め、その中の八名は今や故人である。この十四会は今日、原田五郎君の御世話で、日曜日でない限り、毎月十四日、例会を馬車道の「竹うち」で開いている。集る会員は、現在八十八歳が最年少である。如何にこの会が永続しているか、また、いつも五、六名は少くとも集るというのも正にギネス・ブックものだと思つてゐる。それに、母校神中とのパイプ役をつとめてくれる後輩の椎谷浜三郎君が私共の会を手伝ってくれるので大助かりである。この浜ちゃんが私の亡妻多美の兄、幸三郎君と同級だったというのも奇縁である。こうした縁の糸はたぐれば際限がないが、作家の獅子文六氏が「横浜今昔」の中で、「東京人を笑ったハイカラさん」と題して「こうして子供たちの野球熱がさかんになつても野球場がないので、十四、五歳のころには歩いて一時間もかかる三溪園まで野球しに行った」と云っているが、三溪園には格好な芝生の広場があった。私も、あそこで、一度野球をやった記憶がある。あの芝生では打球が随分速かつたことを覚えてゐる。

今日のプロ野球の人工芝を見る度に、横浜公園の野球場や、山手のYCACの運動場の芝生を思い出すのだが、神中時代に、同じ学年に喧嘩早い岩田の彦ちゃんというのがいたが、多分、獅子文六（本名、岩田豊雄）氏の弟さんだったと思う。

野球では、何と云ってもY校にとどめをさすが、大正初期におけるY校ナインは横浜を代表する強力なチームで、今日なら超高校級の実力を持っていた。加藤吉兵衛主将（遊撃手）の率いるY校ナインが山口投手の好投によって、菅瀬一馬という名投手を擁して全盛時代を誇った慶大ナインに対して、1対1で引き分けた試合はこの横浜公園球場においてであった。

因に、このY校の主将加藤吉兵衛さん、通称ベ、イさんは新富横町の住人で、筆者の先輩というよりも、野球の恩師であった。

前記の試合で、このベ、イさんはリードオフ・マンとして活躍し、菅瀬投手に三塁打を浴びせて得点に結びつけたのが印象的だった。

山口投手の卒業後、Y校のマウンドを踏んだのは遠藤金太郎さんでした。彼は兄の小学校時代からの友人でしたが、この遠藤投手の女房役をつとめた平井宇之吉君

は三留義塾からY校に入学した素晴らしい捕手で、その技量は抜群でした。この遠藤、平井のバッテリーが五年級のと看、関西から遠征して来た市岡忠雄君の主将だったK中学を破ったのも、この公園球場でした。この市岡さんは、後に早大に進み、加藤吉兵衛さんに次いで主将となり、卒業後はプロ野球のために貢献し、特に巨人軍の総監督となったことは御存知でしょう。市岡さんは中学時代から捕手でしたが、平井君も慶大で森秀雄君とバッテリーを組んで活躍した。森君の方は、慶大卒業後、捕手に転向し、大毎に入って、神奈川師範出身の名投手小野三千磨君とバッテリーを組んで、来日した米国のプロ野球チームを破ったことは、わが球界の語り草になっている。

この森君は筆者と同じ年に神中に入學したが、直ぐ中退して、翌年Y校に転じた。彼は少年時代からの顔見知りで、伊勢佐木町の裏、福富町の住人であった。この森君の如きは日本プロ野球の先駆者の一人ともいふべき人だったが、横浜の球界には大した貢献はしていない。その点では後輩の瀬木嘉一郎君とか、牧野喜一君の功績の方が遥かに大きい。

特に牧野君が当時、神奈川県中等学校野球聯盟のために尽した功績は顕著だった。当時、貿易商業の鈴木茂投手、またその姉妹校、本牧中学の天才児荻田遊撃手等の花形プレイヤーが、Y校や神中等の諸選手と共にハマの学生野球を賑わしていた頃、牧野君は聯盟の顧問として中等学校の選手諸君の技量の向上や、精神の高揚につとめたその献身的努力は高く評価したい。

この牧野喜一君を語るとき、忘れてはならぬのは中村正雄君であろう。この御両人は、Y校と神中という出身校を異にしていたが、早大時代からの知己であり、横浜の学生野球の向上について語り合った間柄だと聞いている。

中村君はハマ政界の大御所ともいわれた実業家中村房次郎氏の二男で、御尊父の歿後は松尾鋳業の社長となった御仁で、早大野球部のマネジャー時代から部長の恩師安部磯雄先生の知遇を得て、学生野球の真髓を把握し、卒業後、先生の御長女を娶られたことは御存じの方もあろうでしょう。

中村君の唱導する精神的な野球指導は、前述した牧野氏と共に聯盟顧問としての權威を高めた。

こうしてY校と神中の先輩諸氏が率先して神奈川県野球聯盟の参加校の和を計り、技術の向上に努めた結果、従来、神静大会で苦杯を嘗めていた神奈川だが、昭和三年、神奈川代表の県立商工実習学校が静中を破って久し振りに甲子園へ駒を進めることが出来たのである。これは偏に中村、牧野両顧問の陰の力があつたからだと思ふ。この中村君は御尊父がハマの実業界や政界のために東奔西走されていたときに、手弁当で盛んに球場を往来していたのである。

筆者は神中と早大時代に彼の先輩ではあつたが、この聯盟では彼から種々と学ぶところが多かつた。また牧野さんからは、自分が商工の野球部に関係していたので、選手の御指導をお願いしたこともあり、また、自分個人としても御厚誼を頂いた。こうした野球が取りもつ御縁で、中村、牧野の両君は爾来私の敬愛する友人となつた。また、特に、自分の教え子、真野、村田の両選手の如きは、単に技術面だけでなく、人間形成の点で、この御兩人から大いに学ぶところのあつたことを知り、私は有難く思っている。

昭和二年神宮球場の起工式に当り、そのグラウンドの基礎工事で、土運びや地馴

らして、京浜の学生野球の選手（当時の五大学を含めて）が動員されて勤勞奉仕（一人日当金二円、これは神宮奉讃会に寄付した）に汗を流した。これに対し、當時摂政の宮であらせられた今上陛下から大学及び中等学校の野球聯盟に、夫々金一封が御下賜になり、それを以て大学も京浜中等学校も、夫々摂政杯を作つて、春秋二季の争覇戦の優勝校に授与することになった。

京浜の中等学校での第一回争覇戦は、結局、東京の慶応普通部と横浜の県立商工との間で争われたが、幸いに商工が見事な逆転勝をおさめて、その栄えある賜杯を獲得して横浜に持ち帰り、学校の内庭でその戦勝報告を行った。このとき部長だった筆者は流石に嬉しさで胸が一杯になった。

この摂政杯を中央にして、校長の煙洲鈴木達治先生、山本政人主事が夫々左右に並び、校長の隣に野球部長、山本先生の隣に牧野聯盟顧問が坐つて記念撮影をした。この写真は県立商工の創立四十周年誌に載っている。

さて、この慶普との優勝戦は早大の戸塚球場で挙行され、前半、慶普が優勢裡に試合を進めたが、後半になって商工が盛り返し、最後に土性君どしよの逆転打で慶普を破

った。

この試合で筆者が先ず驚いたことは、横浜を代表する平沼亮三市長が慶普のベンチにデンとおさまっていたことである。最初は、横浜市長でもある亮さんが敵方に味方するとは奇怪至極と思ったが、よくよく思い返えせば、亮さんは根っからの慶応ボーイで、幼稚舎からの生えぬきの人、慶普のために声援しても何も不思議はなかったのである。平沼さんは、昔新富亭の御常連だったし、筆者の兄弟が皆慶大の出身だったので顔見知りの間柄であった。私自身も、その後、横浜高工の教授となり、平沼さんとお目にかかる機会も多くなったので、戸塚球場での恨みもとくに忘れてしまった。

ところで、神奈川県の中高等学校野球聯盟が東京市の中高等学校野球聯盟と密接な関係を持つようになったことは、何と云っても中村正雄君の功績であろう。それは東京側の顧問であった日石の副社長大村一蔵氏と昵懇じっこんの間柄であったからである。大村さんとしても、あれだけの社会人が学生野球に肩入れしていたというのは、御自身が野球をはじめ、スポーツに関心を持っていたからで、確か、画家の小杉未醒さ

ん達の天狗倶楽部の仲間で相撲をとったことがあったように私は記憶している。

中村正雄君がハマの実業家中村房次郎氏の御曹司であることは已に述べたが、正雄君の生活は極めて地味で、その御家庭も、奥様と独り息子の俊ちゃんとの三人暮らしで頗る静かなものであった。筆者が初めて御宅を訪ねたときは俊一君が未だ無邪気な少年だった。その俊一君が神中から早大へ進み、卒業後は新劇の世界へ飛び込み、例の劇団「仲間」の指導者となり、また、自ら舞台の演出をつとめるかたわら、テレビなどで「お父さん」役で活躍していたが、これからというときに亡くなられたのは実に残念だった。これより先、正雄君も比較的若くして逝去し、将来ハマの実業界に雄飛せんとする素志を貫徹出来なかったことはさぞかし残念至極であったに相違ない。

横浜の生んだ演劇人としては、神中で筆者の一年後輩、前記中村君とは同窓の田島淳君がいる。彼は神中から早大に進み、演劇研究に専念した。卒業後、帝劇の舞台監督をつとめ、また、「能祇のうぎと泥棒」(1921年作)という脚本を書き、筆者の早大英文学科でのクラスメイト小寺融吉君が1922年に書いた「真間の手古奈」

の演出をしたりした。

田島君は色白で、袴を穿き、白足袋といういでたち、はどう見ても文士であった。文士スタイルの典型は、ハマ出身の山崎紫紅先生だった。もっとも、それは余所よそ行きの服装であるが、西戸部郵便局長として窓口の向うに坐っている山崎小三しょうさうさんはちよつと取りつきにくいおじさんのようであった。

山崎先生は、筆者の親戚で、嘗て政友会代議士だった横浜弁護士会の会長を勤めた安村竹松先生の友人の一人で、社会党主だった飛鳥田一雄氏の御尊父喜一先生などとも知己であった。そんな訳で、安村家を訪ねたときに、山崎先生にお目にかかったことが何度かあったので、筆者には忘れられない人である。

紫紅先生はハマの生んだ最も著名な劇作家で、帝劇の懸賞募集で入賞し、一躍有名になった。河竹繁俊先生を記念して編集した早大演劇博物館刊行の「芸能辞典」から先生の作品を引用すると、1923年以来、1937年までに、国定忠次、千利休、蝦夷えぞの義経、柴田勝家、竜口法難たつのくちのほうなん等がある。

紫紅さんが史劇の作者として一家をなしたのは坪内逍遙先生の影響によるところ

が多大であったように思う。

坪内先生は、御承知のように、沙翁サウエル・プレイズの国史劇、ジョン王、リチャード二世、ヘンリ四世の第一部と同二部、ヘンリ五世、ヘンリ六世の第一、第二、第三部、リチャード三世と、ヘンリ八世の都合十部からなる史劇を翻訳なさった。

イギリスのサー・フランシス・ドレイク提督が西班牙のアルマダ艦隊を撃破した大勝利（1588年）は国民の士気を非常に高揚した。事実、この快挙が、これから売り出しのシェークスピアの創作意欲をかき立て、その結果、生れた史劇が聴衆の嗜好に投じたのである。また、エドワード三世（在位1312年～1377年）の1338年以来、1453年まで続いた例の百年戦争中、英仏の葛藤を描いた上記国史劇は、四大悲劇には見られぬ登場人物の性格描写が見事である。

これらの国史劇はイギリス本国では勿論、わが国でも近年上演されるようになった。

沙翁劇の話が出たので、山手のゲーティ座について一言し度い。外人墓地に近く、ハマの文学散歩のコースにあるこの劇場は、外国の旅役者などが興行した珍しい

ところで、特に沙翁劇などが観られるというので明治時代に坪内逍遙をはじめ東京から文士連中が来たものである。

「横浜今昔」の中で大仏次郎さんがこう云っている。「海岸通り伝いにフランス山に登ると、そこにゲ、エ、テ座があつて、外人相手の芝居を専門にやっていた。香港あたりから来た「バンドマン」というオペラの劇団がよく実演したのをおぼえているが、あるとき、英国の劇団が来てハムレットやサロメを上演していた際、学生時代だったぼくは意気揚々と出かけたものです。セルの着物にハ、カ、マ、バ、ギといういでたちだったんですがね。当時はみなイヴニングの礼服で芝居見物としやれこんでいた。その中でひとりがいかめしい、服装だったのでちよつと恥ずかしかった」

この劇場を人は「ゲート座」と呼んでいるが、「ゲート座」というのは誤りで、「ゲート座」と呼ぶのが正しい。と云うのは、この名称はロンドンの「ゲート座」から取ったのである。独逸の文豪ゲーテの名前を「ギョーテ」と云つたりした明治時代だから、ゲートイがゲートになつても不思議ではなかつたのであろう。

自分はこの劇場では芝居を観たことはなかつたが、少年時代、夏に、山下の海岸

へ泳ぎに行くときに、この劇場の前をよく通ったものである。

野球漫談が文芸の迷路につい飛び込んでしまったが、再び野球の運動場へ引き返えすことにしよう。

其後、山下の海岸は埋めたてられて、「新山下の運動場」が出来た。

ひところ、ハマの名物となった「高商、高工の野球定期戦」が第一回から第三回までは、この新山下で行われた。因に大正十四年七月から昭和二年七月に至る間である。

戦績は、第一回が4 A対3で高工が勝ち、第二回は5対4で高商が雪辱し、第三回は、高工宇田投手が1対0で高商を完封したが、息づまる投手戦となり、また、高商中堅手増田喜三郎君の好守が特に光っていた。実に定期戦始まって以来の好ゲームだった。

第四回戦は滝頭の塵芥焼却場隣の運動場で挙行されたが、折柄の暑氣に加えて、隣の塵芥焼却場からの悪臭が鼻をつき、かてて加えて、雲霞の如き蠅の襲来で観衆がカン、カン、帽を以てこれを打ち払う光景が翌日の新聞に漫画として掲載されるほど

滑稽な風景であった。この試合は前半高工が押し気味であったが、後半になって宇田君の投球が乱れ、最後に高商の唐沢君（右翼手で二番打者、左打ちの選手）の左翼越しの二塁打によって、試合が逆転、結局4対2のスコアで高商に凱歌が上った。それから昭和四、五年と二年間、定期戦が中断されたが、昭和六年、新装成った公園球場で定期戦が復活し、この年から三回戦によって雌雄を決することになり、源平紅白の応援旗がスタンドの両翼において打ち振られ、横浜名物に相応しい堂々たる対戦となった。

復活第一回戦は、高工西田投手の不調で、高商の猛打を浴び、12A対5で高商が勝った。第二回戦も6対3で高商が連勝した。

高工のこの敗因は、野球に精通していた初代の池内部長に代った藤村部長が経営の手腕のある人だったが、野球のことはズブの素人だったため、選手の把握が十分に出来なかったためであったようだ。とは言え、工業を専攻する選手にとって、実驗実習に追われ、練習時間が不足の上に、各科に別れている選手の指導が困難だったため、高商に比べて遜色のあったことは明らかである。

藤村部長はこの連敗の責めを負って退陣したが、その後釜にすわる部長がなく、選任に一頓挫を来たした。そのとき、学校長室から電話で、筆者に校長室まで来るようにと御用命があった。で、校長室へ伺うと、「竹内君、君、野球部長をやってくれ」との御命令に自分はびっくりした。と云うのは、野球部長というポストは、校友会では総務部長に次ぐ重要な役目で、講演部長と共に、勅任級の教授が従来引き受けるものだったから、それに、教授に就任してやっと四年目という自分には荷が重過ぎたので、ひたすら御辞退申し上げたのですが、「わしがついているからやりたまえ」との厳命に押しきられて、昭和七年、八年の二年間野球部長に就任した。この二ヶ年間は、筆者にとって針の^{むしろ}蓆の上に坐らせられた思いの二年間であった。初代部長の池内先生の如き長老でも、基礎学科所属の悲しさで、専門各科の先生のように所属学生が一名もいないので、選手全般の統轄が非常に困難だった。況んや新年度における選手の補充は至難だった。それ故、筆者の場合、新年度における選手の補強は全く無理であった。その結果、応用化学に横尾君、電気化学に多田君の計二名しか補充出来なかった。これに反して高商には武石君の如きスカウトのヴ

エテランがいるので、毎年有望な選手をとることが出来た。確かに武石氏は今日プロ野球でも通用する程の名伯楽だった。

昭和七年の定期戦においては、前年都市対抗野球で東京倶楽部を苦しめた仙鉄の五十嵐投手が高商に入学し、前年佐賀中学から入部した左投手の荒木君とで立派な二枚看板が出来た上に、静中から来た宇佐美捕手と組んでバッテリーを固めたので、定期戦は前評判から高工の劣勢が伝えられていた。しかし弘陵健児の意気は高く、結局敗れはしたが、三回戦まで持ち込んだことは選手の発憤、努力の賜であった。

特に一回戦の如きは延長十回に及び、例の巨漢五十嵐君がピンチヒッターとして適時打を放って、3A対2で高商に勝利をもたらした。二回戦は高工の打棒が奮い、荒木投手をノックアウトして、4対1で高工が雪辱した。三回戦は五十嵐投手が初回から登板、そのアンダスロウを以て高工の打棒を完封、10A対1で高商が快勝した。翌昭和八年も三回戦まで持ち込みながら、一勝一敗の後、決勝戦では結局五十嵐君に完封されて高工が敗れた。かくして二年連続定期戦に敗れた高工ナインは、その鬱憤を晴らすために初めて海外遠征を試みた。韓国の釜山を皮切りに、大邱、咸

興、平壤を経て、満洲に入り、撫順、奉天、大連に転戦し、更に海を渡って青島ちんたおで二試合を行い、七勝四敗の成績をおさめて帰国した。この遠征中、最も印象に残っているのは奉天での二試合（満俱と一勝一敗）と、大連での一試合、即ち大連実業との試合で勝ったこと。この試合では早大出身の名投手で大連実業の大黒柱ともいべき谷口五郎君（その功績によって野球殿堂入りした人）を打ち込んで5対3で勝ったことである。この満俱と実業の両チームは共に都市対抗野球で優勝し、黒獅子旗を海の彼方へ持ち去ったことのある強豪であった。

昭和九年には、応用化学科教授今井君が部長になった。この年には昭和七年に入学した横尾省一君が主将としてチームの結束を計り、また、有能な亘理君わたり（現在横浜国大名誉教授）がマネジャーとしてその手腕を発揮し、横尾主将を補佐したので、チームの実力が向上し、定期戦で第一回戦は落したが、二回戦、三回戦と連勝して三年振りに優勝した。好投手五十嵐君が最後の学年であった。高商の敗因は、女房役の好捕手宇佐美君が已に卒業してしまったので、五十嵐投手がその実力を十分に発揮出来なかったのに対し、高工には阿部君という無類の好捕手が稲田投手を良く

リードしたためであった。

翌十年にも連勝し、また勢に乗じて昭和十一年には主将となった阿部君を中心に、浅野中学出身の山本君や呉港出身の川口君等の好投手に恵まれ、高商を連破した。おそらく横浜高工野球部の全盛時代だったのであろう。

この一、二回の定期戦については天下の名投手として聞こえた小野三千麿君や、わが国プロ野球の発展に貢献した功績で野球殿堂入りした鈴木惣太郎さんが戦評を書いている。

こうした戦評は、毎々球界の名士、例えば元老の橋戸頑鉄氏などからも書いて頂いておりますが、これらの戦評は両校野球部の歴史を飾るものといってよいであろう。

また、話が遡るが、昭和八年の高商、高工の野球定期戦に、NHKのスポーツ・アナウンサーとして有名な松内則三さんがネット裏から実況放送をしてくれたことは正にハマの早慶戦が最も華かなりし時であったことを証するものである。

このハマの野球ファンを二分したこの定期戦の勝敗は、高工が昭和十四年に一勝

したので、七勝六敗となったが、昭和十三年までは十二戦、六勝六敗で全くの互角であった。

この光輝ある定期戦の記録「横浜高工、横浜高商野球定期戦史」（非売品）は、高商出身の松野伸弘君が編集者として献身的な努力を以て発行した実に貴重な文献で、定期戦の外に両校野球部の試合記録が載っている。

筆者は昭和七、八年高工の野球部長だったという関係で、この定期野球戦史に、乞われて、「浜の早慶戦の意義」と題して一文を寄稿したが、その冒頭に、「浜の早慶戦と呼ばれた高商、高工の野球定期戦は、金港横浜の野球史の第三期を劃する目覚しい時期であった。この時期は全国的に見て、日本学生野球の黄金時代であった。その意味でこの港都の野球発展の経過を大観することは決して無駄ではないと思う」と記した。

付 記

この野球漫談は、横浜におけるベースボールの歴史について順序立てて語ったものではないので、全くの「random talk」（漫談）に過ぎない。

それで、昭和五十八年六月十五日、東京銀座の交詢社の三階食堂で、高商、高工の卒業生からなる三水会で、筆者が講演しました「卓話　ハマのベースボール」
(本書収録)を御参照頂ければ幸甚です。

(V) 戦争と平和

戦前、わが国の男子は成年に達すると、徴兵検査を受けなければならなかった。これは国民の義務であった。これに合格すると、否応なしに、二年なり、三年の兵役に服さなければならなかった。

この義務年限を軽減して貰うために、師範学校を選んで教師になったり、義務教育を終り、中学なり大学の課程を卒えた者が若干の金を納めて、一年数ヶ月で免除して貰える制度があった。これが一年志願兵制度である。自分は金百八円を前納して、先ず一ヶ年の現役を勤め、終末試験に合格すると、翌年の夏、三ヶ月第一次勤務のため陸軍軍曹として演習召集を受け、それに合格すると、更にその翌年夏、三ヶ月見習士官として応召、そしてその最後の試験にパスすると、翌年、陸軍少尉

に任官、正八位を授与され、予備役に編入された。私の時に納めた金百八円は、その後、増額されたようだが、当時の物価は相当安かったにしろ、その積算の根拠は皆目分らない。

仏教には百八煩惱という言葉があるが、人間には、たしかに心身にまつわり、心をかき乱す多くの妄念のあることは事実だ。坪内逍遙作、「沓手鳥孤城落月」^{はたとぎすこじようのらくげつ}の中で、秀頼が大坂落城の前に、母淀君狂乱の態を見て、落涙し、「この涙は、百八煩惱、一となりて落来^{おちく}る涙じゃ」という科白がある。歳末の除夜の鐘は百八ツをならす。つまり百八煩惱を捨てる鐘である。イギリスのオックスフォード大学の学寮では、帰寮時間に遅れぬようにと百八ツの鐘を鳴らしたことがあったという。これは迷える仔羊のためであらうか。

入営に当り、そんな金の出せない者、特に農家の二男坊や三男坊は、口減^{くちべら}しが出るというので喜んで二年なり三年の兵役に服した。しかも、営内では鱈ふく飯が食える上に、適度の運動をするので、丸々と肥えて除隊し、帰農して、農家の柱となった。また軍隊生活では、初年兵のときだけが苦しいが、古兵になれば、食事や

洗濯には初年兵を顎^{あご}で使い、班長にでもなれば、一国一城の主人気取り、特務曹長ともなれば、将校の列に加わり、雲の上人^{うへびと}といった存在、今日の少年がスーパーマンに対する憧憬^{あこがれ}に似たものがあるので、農村出の若者は進んで現役軍人になったものである。

明治、大正時代の職業軍人は、いわゆる国家の干城^{かんじょう}としての誇りを持ち、氣位は高いが、案外世間知らずで、国際感覚の乏しい輩も尠^{すく}くなかった。だから終戦時における軍人の狼狽^{すて}振りは甚だしく、已^{すで}に五・一五事件（昭和七年五月十五日）で陸海軍将校らが首相官邸などを襲撃、犬養首相を射殺したり、二・二六事件（昭和十一年二月二十六日）で皇道派青年将校がクーデターを企て、下士官千四百名をひきいて斎藤内大臣、高橋蔵相を殺害し、翌二十七日には東京市に戒厳令が布告されるという恰も火山爆発の前兆があった。

これらわが国軍将兵によるクーデターは、満洲事変及び日支事変に触発されて、誇大妄想的「大東亜共栄圏」樹立などという大スローガンをかかげて、隣国を脅^{おびや}かし、ヒットラーやムッソリーニと呼応して、欧米の列強に挑戦し、遂に、真珠湾の

奇襲攻撃（アメリカではトレチエラス・アタック、即ち暗討^{やみうち}）となった。当時わが国ではこの奇襲に対して、恰も今川義元を討った織田信長の作戦の如く、拍手喝采をおくった。

対外経済が如何にわが国の如き小さい島国にとって重要であるかを忘れていたことは愚か千万。已に韓国、台湾の統治においても軍政の失敗があり、ロボットの如き満洲国の独立もわが軍部によってデッチ上げられたものだ。この茫大な満洲への開拓移民の末路は如何だったのか、総ては武力の強制によって築かれた砂上の楼閣であった。「一将功成つて万骨枯る」という名言は余りにも悲惨だ。

とにかく権力の座にある者は、その権勢を誇示したり、伸張したりしたくなるものと見える。いわゆる勝負師という連中が必死にその勝敗を決せんとする悲愴なケースもあるが、一種のスペキュレーション^{speculation}というか賭博に類することがよくある。競馬、競輪等各種のレースは一見スポーツの如く見えるが、本体は賭博だ。人間は弱いもので、そうした賭けごとの泥沼にはまり込む。

世界第一次大戦の後、アメリカのシカゴ大学に遊学した折、自分は野球が大好き

だったので、盛夏のプロ野球をよく見物したが、アメリカン・リーグのシカゴ・ホワイト・ソックスのコミスキー球場へ行ったとき、広告などの出ている外野の壁に「no bet allowed」と書いてあるのを見て驚いた。「賭けごとを禁ず」の意味です。これは嘗てこのホワイト・ソックスが野球賭博のために何ヶ月間か出場停止を命じられたことがあったからだ。こうした掲示の出ていることは相変らず賭けごとが行われているという証拠でもあるらしい。

紐育ジャイアツのポロウグラウンドのセンター・フィールドの背後にある狭い外野席に警官が眼をひからせているのをこの眼で見たことがある。警官が眼をひからせているということは、とりも直さず賭博予防のためであった。

日本が日清・日露の戦に勝って、その戦勝の美酒に酔い、更に大博奕を打ちたくなったのも分らぬでもない。しかし古来そうした野心は空しく潰^{つぶ}えている。マセドニアのアレキサンダー、蒙古のジンギス汗、フランスのナポレオン、独逸のヒッラーの実例がある。

個人の野心が傾城傾国に似て身を誤るばかりか、国を危うするおそれがある。ま

してや政局を担当する同志が結束してファシズムの無軌道をつつ走るとき、軍国主義は忽ち亡国主義に変貌する。

経済戦争をバック・アップする武器の製造工業は、遂には核兵器の生産競争を促し、人類を自殺の淵に投ぜんとしている。

その昔、四面環海の大和島根が外敵の侵入に備えて、「醜の御楯しとといでたつわれは」といった防人の歌には純粹な愛国心、犠牲的な精神が窺われるが、それにしても、辺疆の地から狩り出される一種の徴兵制度だったようだ。

防備は飽くまでも平和のためで、攻撃的のものであつてはならぬ。ただ「醜の御楯」だという誇りが武器を手にすると、殺人剣になるおそれがあり、しかも、酒に酔い、自制心を失うと、この防衛の剣が兇器に、つまり、「狂人に刃物」となる。

最近まで米国の市内で拳銃が自由に販売されていたために、傷害事件が殖えて当局を手古摺せたという事実が、今日、日本においても見られるようになり、兇器の密輸と共に麻薬の密売が盛んに行われ、若者の上に悪影響を及ぼしている現況は真に慨嘆に堪えない。

「飲む、博つ、買う」の三道楽の中、飲むのはほど／＼にすれば、健康を害することもなく、家庭のお台所に響くことも少ないが、度を越すと、胃潰瘍になったり、癌にもなり、生命とりにもなる。けれど、わが国では、祝儀、不祝儀に拘らず酒が出る。「酒は百薬の長」とか、「酒は憂いの玉簪」ははきなどと上戸に都合のよい口実を以て杯を重ねる。もっとも、今日では、洋の東西を問わず、食卓にワイン・グラスが並び、乾杯の音頭をとる習慣がある。夏には殊にビールで、女性までグツト咽のどを鳴らす。ウイスキーやブランデーのボトルをあける女僕も少くない。とにかく、昔よりは遙かに酒量は多くなっている。しかも、酒屋の棚には洋酒の瓶の方が幅を利かせ、灘の生一本きなどは隅の方で伏し目勝ちにしている。これも御時勢で仕方がないのだろう。

賭博の方は、前述したように競馬、競輪を初めとしてスポーツまで毒しているのが現況であるが、パチンコの如きゲームを楽しむばかりでなく、景品稼ぎでその生活を支えている気の毒な人も少くないらしい。いずれにしても朝っぱらから開店前に列を作って待っている図は醜態である。甲子園の全国高校選抜野球や、巨人阪神

戦というプロ野球の好カードを観んと開門前から列を作って待っている光景と大差がないと云えばそれまでだが、時間の浪費であることに変わりはない。でも、青天の下、打球に向って突進する選手の懸命な動きと滲み出る汗とには青春の美しさがあり、これを観て感動の拍手を送る観衆の胸には老いも若きも、それぞれ青春の鼓動が高鳴ることであろう。プロ野球のファンに望むことは、もっと冷静に、適当なマナーズを以て観戦し、野球の醍醐味を享受して欲しい。

翌日に仕事を控えて、マージャンに耽ることは徒に身心を労するだけで、賭事に打ち興ずるのあまり、借金をしてサラ金で金を借り、首がまわらなくなっておしまいである。

「買う」に至っては、公認の吉原とか島原、あるいは、江戸時代の岡場所の如き赤線区域のなくなった現在では、大っぴらに入ることの出来ない問題の場所に入することは禁止されており、その禁を犯すことは今日は御法度だから、単に風紀を乱すばかりでなく、家庭争議の原因ともなる。

戦後における道義の頽廃はお話にならぬ程甚しいもので、セックスの乱れは罪惡

を生み、純愛は影をひそめて、心なき乙女達を売春の泥沼へ引きずり込んでいる。「チャタレー夫人の恋人」を不道徳視する前に、学校並びに家庭の教育を再検討すべきである。映画におけるベッド・シーンの氾濫は、その根底に罪の温床があるので、映画監督が徒らにヌードを促しているのでもあるまい。今日の男女が浅はかにも結ばれ、無思慮にも引き裂かれ行く罪の意識の低下した社会の暗黒面をリアリズムのタッチで映像化せんとしている努力が観衆によってどれくらい評価されるか。また、現実に観衆並びに周囲の人々がどれだけ反省し、自己の生活の糧かてとなし得るかが問題である。そうでないとしたら江戸時代の春画から一步も出ないことになるであらう。

映画の影響と云えば、最近戦争映画の復活は、戦争に対する警鐘と云うよりも、右翼的な好戦気分を煽あおる恐れがある。

およそセンセーショナルな事件は、デマによって誘発される傾向がある。戦争に関する情報はその真偽の判定が困難で、味方の勝報はとかく誇張されるものだが、戦局が不利になると、その報道が怪しくなり、デマがいよいよ乱れ飛ぶ。大東亜戦争

の場合がその良い例であった。最初は頗る景気がよく、またその報道も正しかったが、だん／＼と怪しくなり、その損傷についてはひた隠しにかくすようになった。

少年時代に、筆者は新富亭の隣の博集堂書店の店先に掲げられる絵草紙で日本海海戦の模様などを知ったものである。「皇国の興廃この一戦にあり」のZ信号なども当時のわが国民の胸を躍らせたものである。横須賀にある東郷提督の旗艦三笠は不滅の戦勝記念である。これはトラファルガーの海戦でその武勲をあらわした英国のネルスン提督のヴィクトリー号の如きものである。

東郷さんは東京赤坂の神社に祀られ、ネルスンは、昨年イギリスのチャールズ殿下とダイアナ姫との御婚儀のとり行われたセント・ポールの大聖堂内に埋葬されている。

東郷元帥はその温厚なお人柄によるのでしたが、日露戦争の戦死者の墓碑によく揮毫なさったようである。久保山の一隅にも、閣下の御揮毫になった故陸軍中尉吉本平四郎君の碑がある。たしか、この方は松影町の牛肉屋さんの御令息だったと記憶する。

筆者の恩師、初代の横浜高等工業学校長鈴木達治先生は六ッ川の御宅の庭に東郷神社を祠っておられたことは有名である。この神社の下に、「入愚亭」という四阿あずまやがあった。そこで私共は先生のお話を拝聴するのが楽しみでした。

日露戦争当時、出征兵士の歓送迎の盛んであったことは申すまでもないが、戦歿者の葬儀が延々長蛇の列を作ったことは大変なものだった。この葬列に各町内から参加する人が非常に多かった。伊勢佐木町の町内会は派手だったので、揃いの衣裳で、夏には麻の着物に草鞋わらじばきだったことを覚えている。

昔は戦で功名手柄をたてるのは武士の誉はまれとして華ばなしかったが、足軽、郎党に至ってはその労苦は並大抵ではなく、町民や農夫と同様、一種の被害者であり、難民に等しいものだった。

明治の御代になって、士族とか平民の別なく、戦功により金鵄勲章が頂けるようになり、これの御下賜を無上の光栄と考えた。だが、庶民の中には「何のための戦争か」すら知らぬ者が少くなかった。「御国のため」というのは防人さきもりの人生観に外ならない。従って拳国皆兵は肉体による防壁であっても精神的城壁とはなり難い。

今や新兵器が発明され、これの製造が急務となり、列強はその競争に大童となっている。従ってこれら新兵器の操作が兵に課せられる唯一の仕事となっている。上官に対する敬礼が滅私奉公に通ずるなどと考えたなら、それこそ錯覚である。自己の存在価値を認識し、個人間の人格的バランスが保たれ、国民の幸福の上に一つの光明として仰がれる至尊こそ敬慕すべきものであり、あくまでも平和を土台として国家の存在が可能であり、また国際間の融和が成立するのである。

これは私共の希望で、一国の防備は、それぞれの国家が自己の責任において無駄な紛争を避け、無益な武器による鬭争を断念することにある。とまれ、平和のための兵役であるべきだ。戦死者の遺霊を慰めることは良い。戦死者の遺家族が遺霊にぬかずくのも当然であり、結構であるが、国家宗教として政府の代表者が率先して参拝し、一般市民にこれを強制することによって、戦争を美化し、右翼的運動に共鳴して、挑戦的武力抗争を謳歌するが如きは言語同断である。

自分の一年志願兵時代を顧みて、訓練によって体力を鍛えることの出来たことは認めるものの、体力の強化、忍耐力、つまり、物質的耐乏力の点では若干の進歩が

あつたことも自認しているが、純粋な精神力に基ずく思考力、洞察力は果して向上したであろうか。

正直に申して、勤務中は夢中であつた。ただ、日日無事を祈るのみであつた。両親はじめ、親族は皆そう願っていた。息子の無事を確めるために、よく道玄坂辺で甘い物を買つて面会に来てくれたものだ。黙々としてお寿司を食べながら、母との視線が合う度にニヤリと笑つたのである。また、父は夕方から忙しいので、日曜日の昼頃、衛戍^{えいじゆちがい}地外に出られぬ私のために、大森海岸の松浅^{まつあさ}という料亭で私を迎えてくれ、美味な昼食をご馳走してくれたりした。

ところで、平常の演習でも危険がないと云えば嘘になる。一期の検閲が終つたある日、工兵の架橋材料の橋板を積載して行進する演習があつたとき、要領の悪い自分^{きやうしや}は一番遅れて厩舎^{きうしや}へ行き、前記行進のための輓馬^{ばんば}を物色したが、殆んど出払つてしまつて、一頭しか残っていなかった。厩舎当番の古兵に尋ねると、「そいつは立派な馬だ」とのことで、引っぱり出したが、成程品の良い馬だった。後で分かつたのであるが、乗馬として調教したが失敗して輓馬に格下げられたとのことであつた。

この馬に轆ひかせて行進の列に加わったが、車輪の音が激しくなったとき、この馬が突然狂奔して駆け出した。手綱を放してはならぬとの平素からの教訓を守って自分は必死だった。我慢に我慢したが、自分の力では馬力ばりきには抗し難く、遂に手綱を放してしまった。すると、その狂奔した馬は、そこに投げ出されていた私を目がけて突進して来た。そして例の架橋材料を積載したその車輛が私の身体の上を飛ぶように走り去った。

これを見た志願兵係の松山教官は真青になった。一年志願兵を一名殺したと思っただからである。自分は一瞬呆然としていたが、むくむくと起ち上った。すると、教官は大喝一声、「馬鹿野郎」と怒鳴った。

私は不思議と生命拾いをしたのだ。それは、車輛が私の身体をひく寸前に、車輪がそこにあつた小石に触れてバウンドしたらしく、僅かなかすり傷で済んだのだ。演習後、班に戻って鏡を見たら鼻梁はなばしらが傷ついていた。私はぞっとした。

また、不思議なことには、大正七年十二月一日、東京上目黒のこの輜重兵しちよう第一大隊に私が入隊した際に、母が私の財布の中に入れておいてくれた「成田山」の御札

が真二つに割れていた。正に奇蹟であつた。

私はこの事を早速手紙で母に知らせた。母はその手紙で、私が奇しくも九死に一生を得たことを知って驚き、かつ喜んで、当時慶大に在学中の弟竹雄を御礼参りのため成田山へ急行させた。

こうした心配をかけたお母さんを、またまた、はら／＼させるような事件が起つた。

それは漸々^{だんだん}と除隊が近付いた晩秋のことであつた。自分の隣に寝ている古兵のEさんから洗濯綱を借用して洗濯物を干したことがあつた。恐らく三期の検閲が近い頃だったのであろう。「本日は晴天なり」で、洗濯物が十分乾いているであろうと、干し物場へ行つたところが、自分の洗濯物は影も形もない。

検閲前なので、員数を揃えるために誰かが盗んだのに相違ない。盗まれたのは官給品だから、その盗品の出る訳もなく、また、盗まれましたと届け出ることも出来ない。衣袴^{いこ}（シャツやズボン下）は早速手に入れなくてはならぬが、Eさんから借りた洗濯綱は何としても早く返さなければならぬと思つた。

それで母のところへ手紙でそれらの品を至急買って持ってきて貰いたいと頼んだ。母はその私からの頼まれ品の中に「細引き」とあるのが気にかかったらしい。万一息子が妙な気でも起したら……と不安になったに相違ない。近所に、軍隊生活の経験があるGさんのところへ相談に行ったということの後で知った。

Eさんには借りた品物を無事に返却して私もホッとした。母も例の細引の経緯が分かって安心したようだ。

しかし、そこには、まだ、コメディならぬ悲劇の大詰が残されていた。

Eさんが、その後、外出した時、酒に酔って帰營に遅れ、重營倉の刑を受けた。平素のんきなEさんも、流石に悄気て、郷里の御両親に対して申し訳ないと思ひ悩んでいたが、營倉から出た数日後に、早朝、例の洗濯場で首吊り自殺をしている彼の姿が発見された。

彼がそのとき使用した細引きは「あの返却した細引き」ではなかったろうかしらと心配したり、また、私の母が「私が自殺するのではなからうか」と気をもんだあの洗濯綱でと思うと、私はぞっとした。一本の洗濯綱が運命の岐路となったようだ。

ヒマラヤを征服するのに必要な生命綱が、ローン（借金）を苦にした男の生命を絶つ兇器になる。兇器と云えば、洋傘の柄の尖端が殺人の兇器となるこの頃である。そんな記事を読んだ自分が、ある朝、出がけに、雨が降り出したので、洋傘を手に玄関で靴を穿こうとした途端、手にした洋傘がパタンと脇に落ちた。すると、傍に置いてあった娘の靴の入ったボール箱の上に偶然落ちた。ブスツと音を立てて。見ると、その箱の上に、銃弾の命中したような穴が開いていたのでびっくりした。偶然でこれだけの被害があるのだから、殺意無くして突いたとしても殺傷力のある恐しい兇器になるんだな、洋傘の尖端が……と思つて慄然りっぜんとした。

旧約聖書の歴代志下の三十二章八節に次の言葉がある。「彼と共にある者は肉の腕腕（an arm of flesh）である。しかしわれわれと共にある者はわれわれの神、主であつて、われわれを助け、われわれに代つて戦われる」という言葉だ。ここにある肉の腕腕、アームが複数になつてアームズとSが付くと危険である。それは武器となるからだ。この武器を捨てさせるものは平和の神以外にはないという訳だ。「戦争と平和」は十九世紀のロシアの文豪レフ・トルストイの傑作である。この小説は、

一八〇五年から同二〇年にかけて、如何にロシアの国情が不安定であつたか、また、民衆の愚昧ぐまいと戦争の悲惨とが織りなす人間の宿命を描いた悲劇である。

元来、戦争と平和は楯の両面で、平和を終局の目的としながら、武器による解決以外に良策を見出し得ないのは人間の浅薄さを告白するものである。

結論として、筆者は、「武器を捨てよ」とただ神に祈るのみである。